



THE EIKO ALUMNI 84

2015年10月1日発行 ©2015 発行人:栄光学園同窓会・菱沼 徹臣 編集人:高橋英治 印刷所:ナガシマ印刷工房
発行元:栄光学園同窓会 〒247-0071 鎌倉市玉縄4-1-1 ☎0467-44-8875 <http://www.eikoalumni.or>

栄光OBフォーラム@TOKYOの開催案内

同窓会では、これまで週末に大船で行われてきたOBフォーラムになかなか参加できない都内在住の方や、日ごろ多忙でなかなか時間の都合のつかない方にもご参加いただけるよう、平日夕方に都内で集まるスタイルのOBフォーラムを企画いたしました。

開催は平成27年11月5日(木)、場所は東京駅に近い日本工業倶楽部会館です。13ページに記載の案内をご覧ください。

校舎解体始まる

大船校舎建て替え工事は夏休み中に仮設校舎の建設が終わり、2学期からはこの仮設校舎での授業が始まっています。9月1日には起工式が行われ、すでに旧校舎の解体工事が始まりました。



中棟の解体(2015.9.12)

2015年度同窓会定期総会の実施

2015年5月9日に栄光学園アロイジオ会館において定期総会が行われました。常任委員会より2014年度活動の報告と2015年度計画の説明を行い、常任委員他の交代や予算案の審議が行われました。総会の様子は7ページをご覧ください。

第6回栄光OBフォーラムの開催

2015年5月24日に第6回栄光OBフォーラムが行われ、大講堂において70周年事業で建て替えを行う新校舎の設計監修を行った21期限研吾氏の講演ならびに実施設計を行った(株)日本設計25期崎山茂氏による新校舎デザインの紹介とパネルディスカッションが行われました。

同日はこれに先立ち、現校舎のお別れ見学会が実施され、多くのOBならびにご家族が校舎に立ち入らせていただき、懐かしい教室の様子を見てまわり、屋上にも上がって校舎と触れ合う最後のチャンスを得ることができました。

同窓会会員全数調査・回答結果のEACONへの掲載

2014年度に実施した同窓会会員全数調査回答結果は会報アラムナイ83号の配布時に要約版を同封いたしました。その完全版をEACON上に掲載いたしました。ログインの上、ファイルダウンロードページからご覧いただけます。

主な目次 No.84

学園からのメッセージ	2	栄光OBフォーラム@TOKYO	13
同窓会会長挨拶	3	母校の様子、恩師の事など	16
組織活性化ワーキング・グループ報告(2)	4	特集:校舎建て替えに寄せて	24
ホームカミングディ関連	5	OB便り	33
2015年度同窓会定期総会報告	7	同期会	36
同窓会活動	10	支部活動	43
		歴史文学散歩	47

校長就任挨拶

栄光学園中学高等学校長 望月伸一郎

今年の4月より校長を拝命いたしました望月伸一郎でございます。同窓会のみなさま方には日頃より学園の教育活動にご理解とご支援を賜り、心から感謝申し上げます。

私は1984年より社会科の教員として栄光学園の教壇に立ち、1995年からは倫理科も担当してきました。栄光で、神父や神学生でない倫理科教員の第一号が私でした。

この4月、新年度を始めるにあたって、教職員全員を前に、これからの栄光学園の教育活動で大切なこととして私があげたことのひとつは、ネットワークの構築拡充ということです。それは、具体的にはまず第一に、国内外のイエズス会の教育機関や諸活動とのネットワークを継続拡充していくことです。

みなさまご存じのように、イエズス会を設立母体とする教育機関の法人統合をめざして、今年の3月に合併契約書が調印されました。新しい法人名は上智学院となります。新法人としての上智学院が経営するのは、高等教育機関としての上智大学、上智短期大学、専門学校としての上智社会福祉専門学校、そして中等教育機関として4つの中高(栄光学園、六甲学院、広島学院、上智福岡)です。ただし、それぞれの教育機関は基本的に独立採算制であり、それぞれの同窓会や後援会なども継続されます。

法人合併のプレス発表からまもなく一年が経とうとしていますが、いまだに「栄光学園は上智大学の附属校になる」という間違った情報にふれることがあります。

栄光学園の進路指導が、今回の法人合併によって変更されることはありません。従来通り、生徒の希望する第一志望校に進学できるよう精一杯サポートする、それが栄光学園の進路指導です。

法人合併の目的は、イエズス会士が少なくなってきた状況下でも、各教育機関がイエズス会学校としての特徴を堅持し、さらに相互のネットワークを拡充することによって、その特徴をより学校の中心に位置づけることにあります。教員研修や生徒交流などの人的交流や情報交流など、イエズス会学校がともに協力することによって、相互の相違点と目指すべき方向を確認することができます。ネットワークの拡充によって、学校としての可能性はますます伸長していくのです。

さらに法人合併によって、イエズス会教育機関の国際的なネットワークを育てていくことも視野にいれています。欧米をはじめ、アジアオセアニア地区には、イエズス会の中高や大学がたくさんあります。そうした機関との人的な交流を進めていくことが、これから本校が進んでいく方向です。

また、ネットワークの構築ということで、私が今後進めていきたいと考えていることは、同窓会とのネットワーク、卒業生のみなさま方とのネットワークです。

現在、毎週1回卒業生の方をお一人ずつ母校にお招きしてOBゼミが行われています。今年は25期と35期の方々にきていただいています。在校生時代のこと、お仕事の経歴と現在のこと、後輩へのメッセージなど、毎回とても内容の濃いお話をうかがえています。あらためてこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

他校の方々に本校のOBゼミの話をする大変関心をお持ちになられますが、実際に実践することは難しいとお話しをよく聞きます。栄光学園でOBゼミが二十年近く続いているのも、卒業生の方々の母校愛が、他校よりとても大きいからにほかなりません。

OBゼミ以外でも、高校各学年で年に一回開催される進路ガイダンスでも、卒業生の方にご講演いただいています。ガイダンス終了後の講演者休憩室に高校生が押しかけて、さらにたくさん質問をさせていただくのも恒例のようになっています。

卒業生の方々と接することで、在校生たちは学校の特徴を再認識し、自分たちの進路を考えるヒントをたくさんいただいています。今後とも同窓会の方々のご支援を学校の教育プログラムの中に具体的に取り入れていくこと、すなわち同窓会の方々のネットワークをさらに太くしていくことは、学校の内容をとても豊かにしてくれるのです。

今後は、今までのように卒業生の方々が栄光にいらしていただくという形ばかりではなく、栄光生の方から卒業生の方々の活躍の現場にお邪魔させていただくという形もできないだろうか、などいくつかの具体的な構想の実現も含めて、今後ともご支援を賜りたいと思っています。よろしく願いいたします。

さて、70周年事業も本格的に始動しました。校舎建築計画は目に見える形で進められています。この2学期から、職員室をはじめすべての教室が仮設校舎に移動しています。今までの校舎の解体工事も進められ、12月までにはあの懐かしい校舎が完全に姿を消します。

しかし、その同じ場所にたてられる校舎は、「みらいの学校」です。これからの栄光学園が果たそうとしている教育活動の理念を、形としてよく現している校舎です。

ご存じのように、新しい校舎は今までの3階建てから2階建てになります。しかも2階部分は木造です。一見すると時代に逆行した建築であると思われるかもしれませんが。確かに近年新築されている私立学校は、まるでオフィスビルのように、先進機器を備えた高層建築型の建物がほとんどです。特に首都圏の私立学校ではその傾向が顕著です。ではなぜ、木造主体の2階建てが「みらいの学校」なのでしょう。

卒業生の皆さま方はよくご存じのように、栄光学園の財産のひとつは、自然に囲まれた広大な敷地です。建築家の隈研吾さん(21期, 今回の建築の監修者)は先日のOBセミナーで、栄光では昔からこの環境を活かして「外に出て身体を使って考える」ということを大切にしてきたこと、そしてこれからの建築に求められていることは低層でヒューマンなもの、自然に開かれたものだと指摘されました。

コンピューターが人間の仕事にとってかわる時代がそこまできています。これから求められているのは、コンピューターと競うことではなく、人間にしかできない発想、人間にしかできない関係構築ができる人です。そのような人間はコンピューターによって育てることはできません。むしろ、栄光学園のように大地に近い、空に近い、仲間が近い環境の中でこそ育てることができます。そのような意味で、これから建つ新しい校舎は「みらいの学校」なのです。

橋梁に用いられるゲルバー梁システムを木造建築に応用して広いスパンを確保している点など、新校舎建築には様々な新技術が取り入れられていることから、国土交通省の木造建築技術先進事業に認定され補助金を受けることになりました。建築技術の先進性という点からも新校舎は注目され、建築業界各誌にもとりあげられつつあります。

しかしながら、最近話題の新国立競技場と同じく、建築費高騰の高波は栄光学園をおそっています。建築計画の内容も、コストをできるだけ抑えたものにする努力を重ねてはおりますが、いっぽうで、完成した建物は栄光学園の名に恥じないものになればなりません。

同窓会のみなさま方にはすでにいろいろとご支援をいただいているところ誠に恐縮なのはございますが、今回の建築計画に対して今いっそうのご寄付を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。ご寄付として約5億円を資金計画として持たせていただいておりますが、現段階ではまだその計画の実現が難しい状態です。

これからも栄光学園が時代の最先端を進み、優れた人材を世に送る学校であり続けるためにも、なにとぞみなさまのご厚意を70周年事業にお寄せいただけますよう、重ねてお願いを申し上げます。

同窓会より

同窓会会長挨拶

会長 菱沼 徹臣 (17期)

母校の新校舎建築プロジェクトはいよいよ佳境に入りました。夏休みに仮設校舎への引越しを完了し、9月起工式、そして旧校舎の解体が始まりました。2017年新学期での供用開始に向け

てもう後戻りはできません。田浦世代から大船世代に、そしてその大船キャンパスも新しい時代の節目を経験しようとしています。学び舎がどうあれ綿々と続く栄光のDNAを、新世代にしっかりとバトンタッチをしていく。そのことへのお手伝いこそが、同窓会の最大の仕事だと思っています。具体的には募金の推進となります。できるだけ多くの卒業生からの、熱いご支援をお待ちしております。既に寄付された方も、17年末までの残る期間には、更なるご寄付をお願いいたします。

同窓会長として「血の通う同窓会」を標榜し3年目となりました。ホームページが益々充実し、EACONも、まだまだ期待値ではありませんが、着実に登録者を増やしています。今年は、予めよりのテーマであった、「若手現役を集める平日都心開催のOBフォーラム」にチャレンジします。11月5日17時30分より東京駅前の日本工業倶楽部にて、栄光卒現役官僚の皆さんのパネルディスカッションを皮切りに新校舎のプレゼンテーションなど多彩なプログラムと、それぞれの分野の先輩方と若手との交歓を促進するいろいろな仕掛けを準備してお待ちしております。

この秋には待望の野球部OB会が正式な支部として立ち上がります。最大規模のポテンシャルを持つ新しい支部の誕生は誠に喜ばしく、創設に東奔西走された発起人の皆様には本当に頭が下がります。今、海外を含む複数の地域支部が正式登録間近となっており、また幾つかの活動グループも登録へ動いています。非公式に集まっているグループにおいても、是非登録を目指していただきたいと思えます。広く会員との情報共有が図れ、何より、参加する機会のなかった新メンバーが、会の存在を知ることができるところに大きな意味があります。折角の会を、特定の世代に止まって先細りさせることなく、次の世代に引き継がれる存在にしたいものです。

総務部長のもとに置かれた作業チームにて、現在の会則につき徹底的に議論してもらい、改訂案の作成をお願いしています。永年にわたり、その時々をの事情を勘案して条文が追加され、今や54条に達しています。組織や会議体も見直し、よりシンプルで運営しやすいものにしたいと思えます。

期の委員が活動していない期が今でもあります。全卒業生には同窓会、同期会などで繋がる「権利」があります。もちろん、これを行使するかどうかは個人の自由です。ただし、期の委員の立場は違います。同期が集まる機会をつくるのは他のクラスメイトへの義務であり、選択の余地はありません。活動をしていない期の委員はあってはならず、各期には速やかに対処いただければと思います。

同窓会は常に人材を求めています。取り組みたいテーマは山のようにあり、やりがいのあるものばかりです。特に30期以降の

卒業生の皆さんに積極的に同窓会活動への参画を強く願います。ご興味のある方は、遠慮なく事務局へお問い合わせ下さい。

新支部の候補を見つけ出し、絞り込みをする。(在住地域系/サークル系/専門職能系/勤務先系/経験外地系/大学系など)その後、関係者の賛同・協力を取り付ける。

③支部活動の支援

支部の活動の問題点を聞き出し、対応策を共に検討し支部活動を支援する。具体的には、類似した活動の支部代表者を集め問題点等を議論し、支部活動活性化策を検討し支援する。

(3) 社会貢献活動支援担当

従来の支援対象以外の活動を積極的に調査し、支援対象を増やす。

[2]各活動支援担当の責任者と協力者を、執行部、常任委員及び組織活性化ワーキング・グループのメンバーが協力して探し出し委嘱する。組織活性化ワーキング・グループは引き続き各担当を支援する。

こういった内容の提言を、行程管理表を付けて、第一回答申として提出した。

それでは、11月5日東京でお会いしましょう。

組織活性化ワーキング・グループからのご報告(その2)

第一回答申とその後の活動、そして皆様へのおねがい

総務部長 青木嘉光 (10期)

前号の「ALUMNI」に、昨年度同窓会会長の諮問機関として新たに設けられた「組織活性化ワーキング・グループ」について、発足の経緯と活動内容について寄稿させていただいた。

今号では、その後3月に会長に答申した「同窓会活動の活性化のための提言」の概要とその後の活動について、ご報告させていただきます。

第一回答申では、同窓会の活性化のため、「同窓会を構成する単位組織(即ち、各期や各支部)の個々の活動をもっと、もっと活発にすること。またそれをサポートする本部の体制も強化すること」に絞って、概略次のような提言を纏めた。

活性化のための第一回答申の骨子
[1]活動サポート部(従来は(3)の社会貢献活動支援活動のみ)の機能を見直し、次の3つの機能を置き、以下のような活動をする。

(1) 各期活動支援

①各期委員の活動促進

書面を送り、期の代表としての役割と責任を自覚してもらう。

②各期活動の支援

各期の活動状況を把握し、対応策を共に検討し、期活動を支援する。

(2) 支部活動支援

①支部委員の活動促進

書面を送り、支部の代表としての役割と責任を自覚してもらう。

②支部新設計画の立案と推進

EACON等のデータを活用し、

【資料】		《各期の活動状況》										
期	代表者	2013年4月アンケート調査(一部、その後の活動補足)			過去2年の活動	補助利用	総会出席	その他の実績				EACON説明会出席
		同期会事務局	同期会名簿	会合頻度				AIJ栄光出席数	会費納入実績	会報送付数		
1期	○	○	×	2年に1回	同期会・弔事	○	○	3	1*	34	X	
2期	○	○	×	1、2年に1回	弔事	×	○	8	53*	64	○	
3期	○	○	○	2、3年に1回	同期会・弔事	○	○	6	71*	85	○	
4期	○	○	○	年1回	同期会・弔事・ゴルフ・ホームパーティー	○	○	2	65*	84	○	
5期	○	○	○	年1回	同期会・弔事・冊子発行・ゴルフ	×	○	5	62*	79	○	
6期	○	○	○	2年に1回	同期会(大/小)・弔事・ゴルフ	○	○	7	78	104	○	
7期	○	○	○	年1回	同期会(大/小)・ゴルフ	○	○	5	95	119	○	
8期	○	○	○	2年に1回	同期会・ゴルフ	×	○	4	80	109	○	
9期	○	○	○	年2回	同期会・弔事・文集発行・旅行	○	○	3	96	124	○	
10期	○	○	○	2年に1回	同期会・弔事・ゴルフ	○	○	5	90	120	○	
11期					同期会			3	82	136	○	
12期	○	○	○	2、3年に1回	同期会・弔事	○	○	12	89	136	○	
13期	○	○	○	4、5年に1回	同期会・弔事・ゴルフ	○	○	6	87	131	○	
14期			×	数年に1回		○	○	8	91	139	○	
15期	○	○	×	年1回	同期会・ゴルフ	○	×	8	85	125	○	
16期	○		×	2年に1回	同期会	○	×	4	95	132	○	
17期		○	×	2年に1回	同期会・ゴルフ	○	○	27	79	127	○	
18期					同期会	○		2	87	133	○	
19期								2	75	143	X	
20期					同期会	○		5	81	133	○	
21期		○	×	5年に1回	無	×	○	7	100	125	X	
22期	○	○	×	5年に1回	同期会・数人の親睦	×	○	7	97	140	○	
23期	○	○	×	年1回	同期会・ゴルフ	○	○	0	79	132	X	
24期								1	87	134	○	
25期								3	80	136	X	
26期							○	2	87	141	○	
27期	○	○	○	5年に1回	同期会(大・小)	×	○	3	95	145	○	
28期					同期会	○		1	60	109	○	
29期		○	×	年1回	同期会・スポーツ・忘年会	○	○	10	89	135	○	
30期		○	×	2、3年に1回	同期会・プチ同期会	○	○	9	71	132	○	
31期		○	○	3年に1回	同期会(大・小)	○	○	6	70	134	○	
32期								0	63	119	X	
33期					同期会	○		0	72	114	○	
34期								0	62	121	○	
35期								3	54	115	X	
36期								0	46	103	○	
37期								2	51	153	X	
38期								0	51	105	○	
39期								1	51	114	○	
40期			×	卒業後2回	無	○	○	0	41	115	○	
41期								3	39	147	○	
42期								0	52	108	X	
43期			×	卒業後2回	無	○	○	0	53	114	X	
44期								2	37	122	X	
45期			×	数年に1回	同	○	○	2	42	150	X	
46期								1	61	139	○	
47期								3	51	128	○	
48期				なし	無	×	×	1	40	127	X	
49期								0	37	148	X	
50期								0	72	146	○	
51期			×	年1回		×	×	1	62	134	○	
52期								0	54	160	X	
53期								1	36	167	X	
54期								3	86	159	X	
55期			×	卒業後1回	無	○	○	1	81	166	X	

[註] *免除納付対象期

広報部より

提言の実現のため、現在行っていることについて

この提言を具体化して活性化の実効をあげるため、4月以降、活動サポート部と協働で動き出した。

各期活動支援については、前回アンケートに基づく資料をご覧いただければわかる通り、積極的な期、消極的な期とさまざまである。そこで10期每位を一括りとして期委員の皆様にご集まって頂き、同窓会に関する忌憚のない意見、情報交換の場を設定することを予定している。

支部活動支援については、新たな支部の立上げのため地域支部、職域支部、サークル系支部など4つの候補を選定し、それらの先に打診をさせて頂いた。なかでも東北支部の設立については、さっそく具体的に検討を始めて頂いている。動き出してみると連絡網の不備などの問題点が浮き彫りになってきており、候補に選定した先の同窓生の皆様のご協力を得ながら、一つ、一つ立上げに向けて準備を進めている。

今後の活動について、

第一回答申では、「同窓会の活動そのものを活性化するにはどうしたらよいか」ということを中心として提言をまとめた。

従って、現在同窓会本部にある事業部、活動サポート部、広報部、総務部、財務部、事務局のうち、第一回答申では、事業部、活動サポートに関連する事項が主体となっている。

第二回答申では、この「同窓会の活動そのもの」を支える管理、事務部門である、広報部、総務部、財務部、事務局という本部各部機能の明確化と組織図の整理などを課題として取り組んでいる。

具体的には総務部と事務局の仕切りの見直しや、広報部ではやれていない「同窓会についての会員のご意見を広く集める広報の機能、それ等を基に新たな事業を考える企画の機能」の拡充等を考え、議論を重ねている。

皆様へのお願い

既に記した通り、第一回答申の提言を具体化し、活性化の実をあげていくためには、同窓会本部だけではなく同窓会会員の皆様のご理解が必須である。各期活動、支部活動、いずれの活性化とも、会員の皆様のご協力がないと成し遂げられないことは間違いなく、今後の活動サポート部からの呼びかけ、お願いに積極的なご協力をお願い致します。

また、これから拡充しようという「広報や企画」の機能には、若い同窓生の新しい力、発想が必要である。また、卒業生が増え同窓会の規模が大きくなるにつれ、事務面の負担も増えてきている。是非若い人の中から同窓会活動に興味のある方の積極的な参加をご期待するものである。同窓会の活性化のために力を貸してやろうという若い同窓生の参画もまた「組織活性化ワーキング・グループ」からの提言の一つである。

広報部長 高橋英治 (28期)

広報部では予てより紙面のA4サイズ化、カラー化についての検討を行っておりましたが、2014年度の全会員への広聴を行った際にも同様の要望が挙がっていたことより、コストの検討を行ったうえで、取り急ぎ今号よりA4サイズ化を果たしました。B5サイズに較べて写真を大きく掲載できること、同じボリュームであればページを減らせるというメリットがあります。文字サイズは他校の同窓紙などとも比較しましたが、結局B5サイズのときのものを踏襲しています。

次にカラー化ですが、これは会報を印刷する用紙の品質もグレードアップさせる必要があるため、コストにも大きく影響します。このため今号では見送らせていただきましたが、さらに検討を続けます。

ひとくちに紙面サイズの変更と言っても、印刷コストはページ数の多寡によりB5サイズと差が大きかったり小さかったり、また発送に用いる封筒も新たに用意したり、さらには印刷を終えて封筒におさめた多量の会報を郵便局に持ち込む際の箱のサイズにも影響するといった事実と直面し、簡単にパソコン上でファイルの設定を変えるだけではないことを痛感しています。

会報、ホームページとも記事の内容については今後も改善をまいります。皆様のご意見もご寄稿も大歓迎ですので、どうぞ同窓会事務局にご連絡ください。

ホームカミングデー

OBの部屋“ALUMNI”

同窓会副会長(事業担当) 山田宏幸 (30期)

平成27年5月9(土)、10(日)の両日、第68回栄光祭が開催され、今年も同窓会ではHomecoming Dayとして“OBの部屋ALUMNI”を開設し、卒業生やご家族が母校でほっと一息、休憩の出来るスペースを提供しました。

今回も例年好評の“新宿さぼてん”の“かつサンド”やお茶菓子などを用意してOBの皆さんを迎えました。若いOBを中心に、例年通りの盛況ぶり、また先生方や中高年OBの皆さんにも多数ご来場いただき、旧交を深めていただきました。

前日の会場設営はここ数年と同様、今回も同窓会事務局の奮闘で無事完了。会場には、過去の高1ゼミ一覧を掲示するなどして、同窓会の活動や現在の学園を紹介しました。また今年は、母校創立70周年事業に協賛して5月24日に開催された“新校舍建築シンポジウム”の参加募集もOBの部屋で行いました。

土曜、日曜とも天候に恵まれ、記帳した来場者数は385人(土

曜日202人、日曜日83人)で、例年通り多くの方にお立ち寄りいただきました。来場者が多いとはいえ、会場が広いので極端に混雑することもなく、聖堂ホールのサロンとしての開放的な雰囲気を楽しみ、ご活用いただけていると思います。



2015年度OBの部屋ALUMNI

当日の会場運営は、同窓会常任委員で53期川本さん、牛久さん、大谷さん、62期の谷口さんと濱崎さんなど、若手同窓会委員が中心となって行いました。(とはいえ、事務局吉田さんはいつもながらの大奮闘。感謝しきりです。前山、高橋、増木氏他委員の皆さま、いつもながら大変お疲れさまでした。)

また、EACONの会員登録にも対応しました。昨年度からサービスを提供しているEACON (Eiko Alumni Communication Network) は、従来のホームページとは別に、同窓会員間のコミュニケーションと名簿情報管理・活用の充実などを目的とした会員専用サイトで、同窓会ではさらなる活用に取り組みようとしています。

OBの部屋“ALUMNI”は10年以上の歴史を有する定番事業ですが、おかげさまで年々少しずつ来場者も増え、記帳者は10年前の250人程度から約1.5倍になりました。今後はよりニーズに合った満足度の高いものにしていければと思います。次年度は、学園創立70周年に向けた新校舎建築や関連する同窓会事業の紹介なども行っていきたいと思います。今年来場された方、特に、惜しくもかつサンドをゲットできなかった方は、是非とも来年もお越しく下さい。また、今年、いらっしやれなかった方、来年こそお越しく下さい。(来年のご来場を促しておいて恐縮ですが、9月から本格的に校舎の建て替え工事を行っており、どのような形で来年度の栄光祭が行われるか分からない状況です。OBの部屋等詳細はALUMNI次号や同窓会ホームページ等でお知らせする予定です。)

なお、同窓会事業部では、OBの部屋“ALUMNI”への若手OBの来場者が多いこともあり、若いスタッフが企画から運営までを行い、斬新なアイデアと行動力を集結できる仕組みを引き続き探っています。皆さん、ぜひ妙案やアドバイスを同窓会事務局までお寄せください。特に若手の皆さん、積極的な参加をよろしくおねがいします！

同窓会追悼ミサ

大島弘尚 (14期)

栄光祭1日目の5月9日学園聖堂において、この1年間に亡くなられた、4人の恩師と1期生から32期生までの34名の追悼ミサを、8期作道宗三神父と27期伊藤淳神父の司式で行ないました。



追悼ミサ (2015.5.9)

学園より望月校長が共同祈願でご参列、11組のご遺族、ご友人を含む60余名の参列者一同で、故人らのご帰天をお祈りいたしました。

ミサ後、アロイジオ会館ホールにてご遺族、同期生ともに故人を偲ぶひと時を持つことができました。金子省治先生のご家族からは、入院中と最後の様子を伺うことができました。1期生の奥様は、ご本人から聞いた母校の話を披露してくださいました。



追悼ミサ後に催された故人を偲ぶ集い

金子先生のお孫さんも参列し、OBの部屋に展示された金子先生が主催された同窓会の歴史文学散歩の記録などをご覧になり、おじい様の色々な活動の一端を知ることができたと思います。

2015年度同窓会定期総会報告

同窓会事務局

5月9日(土)12時より2015年度の同窓会定期総会が例年通り、栄光祭の初日に合わせて開催された。

アロイジオ会館大ホールで開かれ、菱沼会長はじめ役員・常任委員21名、各期委員35名、支部委員8名、総勢64名が出席した。



総会全景(2015.5.9)

議長には花井勝三氏(12期)が選出され、以降の議事を進めた。

冒頭、菱沼同窓会会長の挨拶の後、来賓の萱場理事長、望月校長よりご挨拶を頂戴した。

《菱沼同窓会会長の挨拶》

同窓会会長を2年前から仰せつかっています。

この2年、“血の通う同窓会”にしたいということで、特にコミュニケーションを改善して、自分が参加したい人にはその機会や情報があるという状況を目指して副会長・役員協力を得てやってきました。



菱沼会長

EACONという新しいネットワークシステムを導入し、普及には未だハードルもありますが、同窓会活動に結びつけていきたいと思っています。

また、組織のあり方・会則などをもっと新しい時代に合わせて変えていきたいと思っています。

学園70周年事業の新校舎募金活動はこの先2年間の仕事として、皆様のご支援をお願いします。

今年の卒業生は63期生で、同窓会員数も1万人を超えています。

私は17期卒業で田浦入学・大船卒業のハイブリッド生ですが、

歴史の流れの中ではかなり年上の方で下の方にたくさんの卒業生がいます。同窓会も新しい形に取り組んでいかなければならないと思っています。来年度に向けて新部長など若がりも図っていきます。

《萱場基理事長のご挨拶》

今日は2つのテーマについて報告します。

一つは新校舎建設についてです。2017年度の学園70周年に新校舎を実現したいということで始めてきました。今日に至るまでこれはもうだめかなと思うような時もありましたが、多くの方々から70周年の新校舎は今までの栄光の伝統を引き継いでいくためにも是非とも必要だとのご意見をいただき、私も力付けられました。

資金面では先月20日現在約1億4千万円余りの浄財が寄せられています。と言っても未だ不十分で同窓会の皆様のご協力もよろしくをお願いします。

二つ目ですが、上智大学を設置している上智学院と栄光学園など4中高校の5学校法人の合併の計画が進んでいます。一つになって、イェズス会教育をより深めていきます。今年3月に合併契約が合意され、来年3月31日には学校法人としての栄光学園は解散し、4月からは上智学院が上智大学と4つの中高校を設置する法人として新発足します。このことについて、多くの卒業生の方々から栄光学園がなくなるのではないかと、校名が変わるのではないかなどのご心配をお寄せいただきました。解散するのは学校法人だけで栄光学園中学高等学校は存続しますし、皆様が築き上げてきた伝統とか栄光学園のいろいろなよい教育の営みは継続され、より深まって豊かになります。もちろん栄光学園同窓会も引き続き栄光学園のためにご協力いただければと思います。そして先ほども建設の募金についてお話ししましたが、栄光学園のために拠出された募金は栄光学園に限定して使っていく、ということも上智学院と取り決めていきます。

皆さま方には引き続き栄光学園の伝統を築き上げていくためにご指導・ご鞭撻をお願いします。

《望月校長のご挨拶》

4月から前任の金子校長の後を継いで栄光学園の校長になりました望月です。私自身は1984年に栄光学園に社会科の教員として着任して以来ずっと栄光学園に勤めてまいりました。

今学校は長いスパンで見ても大きな節目を迎えています。まず、校舎建築、先ほどハイブリッドという話もありましたが、今の在校生がまさにハイブリッド卒業生となり、古い校舎と新しい校舎を経験することになります。新校舎もハイブリッドで1階がコンクリート、2階が木造という構造になっています。



萱場理事長



望月校長

更に法人合併という話もあり、こちらに関しては特に入学志願者や保護者の方々に丁寧に説明していかなければならないと考えています。「上智大学の附属になるのですか」という質問をよく受けますが、「それは違いますが、それは違います」と説明しています。

こういった節目の中で、校長という大任を仰せつかりました。自分にとっては荷が勝っていると思いますが、私自身栄光学園で教員として神父様や先輩の先生方に育てていただいたという気持ちを持っています。お返しすると言う積りで精いっぱい頑張っていきたいと思っています。

以後議事に入った。概要を報告する。

1. 63期委員紹介

今年入会した63期委員4名の紹介があった。

磯村 直紀	伊崎 慶史郎
前田 直紀	森 裕太郎

2. 2014年度事業報告

関根副会長より議案書に沿って説明があった。

2014年度は「血の通う同窓会」のモットーのもと、2年目として諸施策に取り組んできた。コミュニケーションの活発化と情報共有を狙い、ホームページの充実、また「EACON」の運用も開始された。新たに広聴の一環として全会員対象のアンケートを実施、今後の方向性を検討するための貴重なデータベースを得ている。

予定通り隔年の会員名簿を印刷配布、アラムナイの春秋2回発行のほか、事業部関連の各種イベントも、校舎建築計画の遅れのために延期された「OBフォーラム」を除き、ほぼ予定通り実施できた。

一方、学園70周年事業への支援に関しては、諸般の事情による新校舎建築の基本計画のずれ込みもあって、推進の方向性決定と体制整備が立ち遅れた。同窓会としては、募金委員会(学園、栄光会、後援会、同窓会の4者連絡会)に参加している。

組織活性化ワーキング・グループは、活動サポート部とともに支部活動活性化に具体的な成果を上げつつ、同窓会活動全般に関する改善策について会長へ答申した。組織改編や会則の抜本的見直しなど、具現化に向けしっかり議論し改革に結び付けたい。

3. 2014年度の決算承認に関する件

木村財務担当副会長(30)より収支計算書及び貸借対照表について説明があった。

昨年度の当期収入は1534万円、当期支出は1590万円であった。会員名簿発行で、種々の施策により対前回は320万円削減し、全体としても対予算609万円の削減が出来た。なお当年度会費の未収金は1355万円である。

引き続き、上甲監事(33)より監査報告が行われ、「収支計算書及び貸借対照表の内容は適正なものと認められる」との報告があった。

挙手による採決の結果、本議案は賛成多数で承認された。

4. 役員選任に関する件

関根副会長より議案書に基づき今年度の役員候補者について提案があった。今年度は役員改選の年に当たり、常任委員会で審議した結果、以下の候補者が推薦された。

菱沼会長(17)・関根副会長(20)・山田副会長(30)・原田監事(24)・上甲監事(33)・前山事務局長(13)・高橋広報部長(28)、以上再任、

青木総務部長(10)・近藤財務部長(45)・増木事業部長(30)・島崎活動サポート部長(26)、以上新任、

新任常任委員として、大石(2)・中村(5)・河相(8)・朝海(10)・花川(11)・坂本(17)・宮川(30)・米村(43)・黒川(54)・岡田(62)

その後、新部長・新常任委員候補から挨拶があり、挙手による採決で全員承認された。

また、常任委員会で支部設立が承認された“栄光同窓カトリックの会”と鎌倉栄光会の役員交代の報告があった。

5. 2015年度事業計画承認に関する件

関根副会長より議案書に基づき、今年度の事業計画について、以下の説明があった。

本年度は、継続する課題に取り組むとともに、学園70周年事業への支援を軸として同窓会活動を盛り上げていく。支援活動(募金活動)の組織体制づくり、「OBフォーラム」の開催、広報の展開などを行い、2017年の記念事業完遂へのステップとなる年とする。



花井議長

また、アンケート結果を踏まえ、組織活性化に取り組み、同窓会活動自体の見直し作業も進めていく。来年度の総会への会則改訂案の提示を目標とし、名簿発行と会費徴収、経常収支の改善、常任委員会の位置付けなど、聖域を設けずに議論したい。

今年度は、若手役員の掘り起こしや積極的な登用も一つのテーマである。

引続き副会長・部長より詳細説明があった。

1 学園70周年事業への支援(山田副会長)

・同窓会で2億円の募金獲得を目指す。
・同窓会会員に寄付機会を提供するため、広報・イベントを活用していく。

・受け皿として「母校70周年事業を支える会」を立上げる。

2 事業部(山田副会長)

・5月に「新校舎建築シンポジウム」・「現校舎お別れ会」を開催する

・11月頃に第7回OBフォーラムを東京都内を会場として開催する

・従来からのホームカミングディ・歴史文学散歩は継続する

3 活動サポート部(山田副会長)

・各活動の核となる人材発掘、世代に応じた対応方法を整え、活動サポートする。

・「EACON」の機能を活用し、活動を活性化させる。

・従来の支援対象以外の活動を調査し、新規支援対象を掘り起こす。

4 広報部(高橋部長)

・会報「THE EIKO ALUMNI」の紙面サイズや記事内容について、アンケート結果を踏まえ、改善を図る。

・70周年事業の支援のため、会報に特集記事などの編集を進める。

・同窓会HPは会報に呼応した記事を掲載し、又70周年事業特集等企画する。

・「EACON」の活用促進について、会報・HPでサポートを継続する。

5 財務部(関根副会長)

・同窓会収支は数百万円の赤字が続いており、会費納入率50%超えを目標とする。

6 総務部(関根副会長)

・同窓会会則の全面見直し着手する。

・昨年度発行の名簿に関して寄せられた、様々な意見を生かし、次回どのようにするか等、本格的な議論を開始する。

・各種活動の活性化等により、事務局の負担が増加しているため、事務局との連携を密にし、効率的な対応を目指す。

・10,000会員のデータベース管理の強化も図る。

・本年度、上智福岡中学高等学校で行われるイエズス会校同窓会連絡会(JJHAF)に本同窓会としても参加する。

以上の提案に対し以下のQ&Aが行われた

Q(吉崎委員(4)):新校舎寄付金は、同窓会はいくら位集まっているのか。

A(菱沼会長) :今までに約80百万円です。50周年記念の時、165百万円だったので、今回は200百万円を目標としたい。

Q(古谷委員(21)):会則変更を要する事項とはどんな項目か。

A(青木新総務部長):支部の規定、常任委員は審議するが、会務執行について規定がないとかがある。長年の積上げで全

54条にも及ぶ堅苦しい形を、現代的で分かり易いものにしていきたい。

Q(三春委員(6)):事務局強化策の一つとして自動振込み一本化を図るべき。更に卒業時から振込方式を採用できれば、会費納入率もある程度は確保できると思う。

A(木村財務部長):ご指摘の通り。納入状況管理合理化、終身会費の検討、会報送付など同窓会からのサービスと関連付けなど引続き議論していく。

Q(石田委員(51)):EACON関連で、

・名簿と同期しているのか

・現役世代への周知をどうしているか

・世の中のSNSとの差別化は出来るのか

・データのメンテナンスをどうするのか

A(増木新事業部長):

・今回の名簿からEACONと同期させた。

・現役世代への周知として卒業時にID・PWの配布を行ったが、在校生へのアプローチは行っていない。

・コミュニケーションツールとしてのEACONは低レベル。

EACONの肝は同窓生情報の検索であり、それを中心に考えてもらいたい。

・データメンテナンスは基本的に本人管理としている。いま時、住所よりメールアドレスが重要で、登録促進のための仕掛けも考えていきたい。

挙手による採決の結果、第3号議案は賛成多数で承認された。

6. 2015年度収支予算案承認に関する件

近藤新財務部長より、今年度の予算案に関し、議案書に基づき説明があった。

・収入は、会費収入を保守的にみて、昨年度より若干減少。

・前受金が前年度決算値より減っているのは、今年度は第2グループ対象で会員数が少ないため。

・総務費支出は事務局業務増大への対応、予備費の確保の他各費目を多めに計上

・事業費支出は名簿発行分減少したが、OBフォーラムなどへ対応させた。

・事業計画の予算は、計画に合わせて関連予算を計上している。

・470万円の赤字予算ではあるが、余裕を持たせた支出項目もあり、会費納入率向上施策がうまく働けば、収支均衡も夢ではないと考えている。

山田副会長から活動サポート部について、継続事業は同程度を計上、OBフォーラムについては東京開催もあり例年以上の予算を確保しているとの補足説明があった。

Q(質疑:八木委員(9)):OBフォーラム東京開催はどれ位具体化しているか。

A(菱沼会長):現役世代が集まれるように東京開催を計画し、日本工業倶楽部を予約した。会食費は参加者の会費で賄い、場所代がかからないので同窓会からは花代・横断幕代等の約50万円と考えている。主な催しはパネルディスカッションと名刺交換・会食等。これの成功が同窓会としての大きなステップになると思う。200人以上の参加を期待している。

挙手による採決の結果、第4号議案は賛成多数で承認された。

以上で議事は終了し、閉会した。

同窓会活動

第6回栄光OBフォーラム“新校舎建築シンポジウム” & 現校舎お別れ見学会

同窓会副会長 山田宏幸 (30期)

平成27年5月24日(日)、母校創立70周年事業協賛で第6回栄光OBフォーラム“新校舎建築シンポジウム”を開催しました。また、“新校舎建築シンポジウム”に先立ち、9月から解体の始まっている校舎を最後に見学してもらおうという趣旨で同日に“現校舎お別れ見学会”を行いました。

前日までの天気予報は、あいにくの雨模様。運が良ければ雨が降らないかなという感じでした。“現校舎お別れ見学会”は、校舎内だけでなく、校舎屋上やグラウンドなども見学、散策していただくという企画でしたので、「雨」の予報にはとても気を揉みました。しかし、参加された皆さんやスタッフの思いが通じたようで、当日は最後まで雨は降らず、時折晴れ間も見え、校舎屋上からは富士山を望むこともできました。

当日同窓会委員と学園先生方を中心とする30人を超えるスタッフは、午前中から参集し準備を始めました。なんとか天気は持ちそうな感じです。スタッフは、“新校舎建築シンポジウム”を行う大講堂、“現校舎お別れ見学会”を行う校舎、そして駐車場や場内案内などの各所の3グループに分散して準備を開始し、12時30分からの見学会に間に合うように手際よく準備を完了しました。とはいえ、特に見学会のルートサイン設置と進入規制などの準備には、範囲が広いこともあり思った以上に手間がかかり、見学会グループは大汗をかきながら作業を進めていました。

見学会に参加された大部分の皆さんは、あらかじめ設定しておいたルートに沿って校舎を見学しました。校舎の見学は、1Fの普通教室から2F校長室、3F旧図書室、屋上、外階段から1Fに降り、化学実験室、階段教室、そして正面玄関に戻るというルートです。コースの中には、校長室や屋上など在学习時にはほとん



屋上にも上ることができたお別れ見学会

どの人が足を踏み入れたことのない場所もあり、特に屋上は天気が良好で遠方に富士山を望めたこともあり、多くの方に大好評でした。また、設定ルートにはない校庭や修道院まで足を延ばされた方も多く、皆さん思い思いに昔を懐かしんでいました。

14時からの“新校舎建築シンポジウム”の受付は、見学会開始後の流れで順次スタート。講堂階段上の入口前に設置した机上で参加者カードにお名前などをご記入いた



隈研吾氏

だき、入口で提出後入場していただきました。受付開始時間が予定より早かったこともあり、450人を超える多くの方が参加されたにもかかわらず、さしたる混乱もなく会場が人で埋まっていました。

さて、私はというと、特別講演をお願いした隈研吾氏、新校舎建築プレゼンテーションを行った日本設計の崎山茂氏、岩村雅人氏などとの会場機器動作確認や事前打ち合わせ、パネルトークパネリストの望月校長先生、隈研吾氏、浅尾慶一郎氏、米田哲



プレゼンテーションを行う崎山茂氏

郎氏の事前の顔合せなどをおこなっていると、あっという間に14時近くになってしまいました。“現校舎お別れ見学会”の様子を覗いに行くこともできず、開始までに司会進行内容の確認をするのが精一杯でした。

定刻の14時から予定通り“新校舎建築シンポジウム”をスタート。参加者は458人で、会場の座席数からするとまずまず良い感じ。参加者の内訳は、1～29期が96人、30～59期が66人、60～63期が33人、在校生・父母等が253人、その他10人で、やはり現役父母の関心は非常に高く、またOBでは20～29期が48人で最も参加者の多い世代でした。シンポジウムのプログラムは以下の通りです。

- 1 特別講演 「僕が栄光から教わったこと」
建築家 隈研吾氏(21期)
- 2 新校舎紹介プレゼンテーション
日本設計 崎山茂氏(25期)、岩村雅人氏(34期)、吉岡紘介氏(55期)
大成建設担当
- 3 パネルトーク 新校舎建築に向けて
パネリスト 望月伸一郎 学園学校長、21期
隈研吾氏、31期 浅尾慶一郎氏、44期 米田哲郎氏
モデレーター 菱沼徹臣(同窓会会長)

まずは、講演に先立ち、菱沼同窓会長(17期)から開会のご挨拶、また学園からは萱場理事長と望月校長からそれぞれご挨拶を頂きました。

そして世界の建築家、隈研吾氏による特別講演「僕が栄光から教わったこと」です。パワーポイント画像で隈氏の作品を紹介しながら、隈氏が栄光の学生時代に培ったことや現在感じていること、思いなどが語られました。隈氏が在学中に教わったこととして「外に出て身体を使え」ということがあり、学園の広いグラウンドや豊かな緑と自然、その環境に開かれた使う人のことを考えた新校舎の建築は、勉強だけでなく身体を使い、人のことを考

えるという栄光の教育哲学に通ずるものであり、この環境が世界に羽ばたく人材を育てることを期待したいといったメッセージで講演を締めくくりました。

次に、新校舎設計チームの崎山氏による新校舎紹介プレゼンテーションです。新校舎の設計を行っている日本設計には、崎山氏、岩村氏、吉岡氏の3人の栄光OBがいます。今回はこの3人に加え工事を行う大成建設の担当も登壇し、工事についての説明をプレゼンテーションの後半で行いました。

崎山氏のプレゼンテーションでは、まず初めに新校舎イメージ画像(イラスト動画風?とでも言うのでしょうか…)がスクリーンに映し出されました。とても良くできたすばらしい画像で、これを見るだけで新校舎のイメージが湧きます。新校舎建築までの様々なイベントなどで、活用されることと思いますので、皆さんも是非ご覧ください。そして、パワーポイントを使い、1階鉄筋コンクリート、2階木造のハイブリッド構造の新校舎の説明が丁寧に行われました。崎山氏のOBとしての思いなども加えた説明が一通り終わり、岩村氏と吉岡氏からも新校舎への思いなどが語られました。2階建ての校舎で、かつ2階部分は木造という、栄光が誇る広大な敷地、豊かな自然と一体化するようなすばらしい新校舎に大いに期待させられるとともに、設計監修の隈氏の講演とも併せ、やはり新校舎の設計にはOBの思いが込められているのが良いなあと感じました。

15分の休憩の後、最後はパネルトーク「新校舎建築に向けて」です。パネリストは20期代の隈氏、30期代の浅尾氏、40期代の米田氏、そして望月校長先生。モデレーターは10期代の菱沼会長です。事前の打ち合わせは当日の昼食時のみという、少々無謀な仕込みの状況でしたが、そこは栄光OB同士、また栄光生と長年付き合ってきた望月校長先生ということで、まあ何とかしてくれるだろうという主催者としての甘い期待でパネルトークがスタートしました。

モデレーターが投げかけたテーマは「未来へ継承するもの」「世界へのネットワーク」で、まずは各パネリストからテーマに沿って話をしていただきました。望月校長先生からは、新校舎が厳しくも一人ひとりの生徒を温かく見守っていた神父様の思いを見



パネルトークの様子

事に反映していること。隈氏からは、神父様から教わったこととして、エスプレッソとチーズの組み合わせの素晴らしさが心に残っており、新校舎ではさらに温かさを伝えられるように展望室などに工夫していければよいのではとのこと。浅尾氏からは、世界に開かれた学校として地域の先頭に立ち人材を育成してきた栄光の精神が、今後ますます継承されるようにと。そして米田氏からは、学園生活でのやんちゃな思い出から、栄光で初めて覚えた英語である“Men for others ,with others”が自らの仕事や人生のポリシーに繋がっているといった話がありました。その後、モデレーターとの軽妙なやりとりが続き、栄光の田舎と都会をミックスした強みを活かした海外や日本の田舎などへのアプローチ、海外の大学への積極的な挑戦、自分が伝えたいことをしっかりと伝えられる力を身に付けることの重要性などが、OBから学園、そして後輩へのメッセージとして発せられました。わずかな時間ながら質疑も行われ、あつという間に予定の時間が過ぎてしまいました。出演者の栄光への大きな愛を感じる、とても温かみのあるパネルトークでした。また、モデレーターの軽妙な捌きに私は感心していたのですが、後に聞いたところ、各パネリストの話が簡潔かつ当を得ていたので、次の話題を考え仕込む時間が稼げず、てんやわんやだったとのこと。(たしかに多少バタついていったような気はしましたが…)。それでもなんとか帳尻を合わせてしまい、聞く方にも聞かれる方にも栄光生らしさ、クオリティーを感じたという、ちょっとした後日談もありました。

今回の学園創立70周年事業協賛で行った同窓会事業の第1弾イベントは、多くの方から好評をいただき、概ね成功であったと捉えています。今回のイベントは、同窓会と学園、同窓会委員と学園の先生方が全面的に協力して実施したからこそ成功したと思っています。校舎見学会で校長室や屋上をルートに加えられたのは、望月校長先生始め、学園の先生方のご理解と当日の会場での案内など多大なるご協力があったことです。また、講堂や校舎内の諸々の設営や機器操作など、本イベントへの学園と先生方のご協力、ご尽力には、改めて感謝申し上げる次第です。これからも同窓会では、学園とともに、11月5日の東京での第2弾イベント、さらに第3弾と実施し、学園創立70周年事業を盛り上げていこうと考えています。皆さま、奮ってご参加ください。皆で楽しんでいきましょう。

「OBの本」を展示して

大島弘尚(14期)

5月9日・10日の栄光祭での「OBの部屋」と、2週間後OBフォーラムに行われた「現校舎お別れ見学会」の大会議室(3階旧図書室)での「OBの本」などの展示した感想をまとめました。

展示した本のほとんどは、著者である卒業生ご本人や同期生が、直接本校図書館に送ってくださったり、同窓会室を通して寄

贈されたものです。本校図書館に「OBの著作」として常設公開されている、1期生から49期生までの212冊を図書館のご好意によりお預かりし、卒業年度順に展示しました。

同窓会事務室で保管している本も、図書館とは一部重複しますが「OBの本」48冊と「恩師の本」5冊を並べ自由に手に取り、その場で読むことができるようにしました。

4期の養老孟司氏の5冊、21期限研吾氏の7冊、23期保坂和志氏の10冊などは多くの卒業生にも知られている著作もありました。

あらゆる分野で活躍している卒業生の著作らしく、文学・政治・経済・理学・工学・医学等の専門書以外にも「恋するオペラ(5期金窪周作氏)」、「人質(7期青木盛久氏)」、「スクランブル(11期田中石城氏)」、「新・サッカーへの招待(18期大住良之氏)」、「落語の空間(22期古谷裕司氏)」、「天晴れ小錦(22期小室明氏)」、「スラムダンク勝利学(28期辻秀一氏)」、「論文捏造(34期村松秀氏)」、「お通しはなぜ必ず出るのか(43期子安太輔氏)」など興味を引くものも多数ありました。

若い卒業生が、新たな部署で役立つと言って「これからの知的財産論(7期鴨志田元孝氏)」を熟読していたことは印象に残りました。本人は借出を希望していたかもしれません。

私は、亡くなった同期浜口哲一氏の4冊の自然観察の本、栄光学園で最初に担当させていただいた学年の34期安田敏郎氏の国語学の専門書に触れることができ大変有益でした。自宅近くの植松医院の院長29期植松史行氏は植松紫行のお名前でも4冊も句集を出されていることも初めて知りました。

「現校舎お別れ見学会」では、同窓会室で保管している、天狗(シュトルテ先生)の帽子・田浦創立時の学生帽の徽章・大船校舎新築時の外装茶色タイル・臨海教室新築記念の文鎮などの品も展示ケースで見させていただきました。見学コース案内図に記入しましたので、それらの展示場所をわざわざ質問する卒業生もいました。

今後も、いろいろな方面で活躍するOBの方々には、自身の著作を本校図書館と同窓会事務室に寄贈していただきたいと思います。在校生には、図書室で公開されているこれらの本を見ることによって良い刺激となりますし、卒業生同士のつながりを作る絆となると思います。

今回は展示できませんでしたが、同窓会室には同期生によるOBの追悼文集も数冊保管されます。

70周年に新校舎が整備されてから、同窓会保管の品々とともに、これらOBの本のより有効な展示・活用法も模索してみたいと思います。

朝日新聞神奈川版「青春スクロール・母校群像記」 に栄光学園登場

広報部

すでに同窓会ホームページでも紹介しておりますが、朝日新聞神奈川版に毎週金曜に連載されています「青春スクロール・母校群像記」に5月8日から7月3日まで9週間にわたり栄光学園が取り上げられました。

この連載コラムは朝日新聞が選ぶ神奈川県内の1高校を取り上げ、その現在各界で活躍中の卒業生へのインタビューを通して在校中の出来事や校風などを浮かび上がらせるもので、2012年暮れに連載を開始し、これまでに12校が登場していました。栄光学園が連載のトリを飾ると思いましたが、引き続き現在は日吉のK高校が登場しています。

インタビューの対象者は朝日新聞の記者が選出しており、同窓会では情報の提供に協力しただけですが、インタビューを行った方が合計で39人。中には同窓会でも連絡先を把握していない方とのインタビューにも成功しているそうです。栄光学園編の連載終了後に担当された記者の方にお話をうかがいましたが、みなさん一様にニコニコされていたのが印象的であったそうで、時間を割いていただき長時間インタビューに応じていただいたにも関わらず、わずかに数行にしか記事にできなく申し訳なく思っておられると恐縮されていました。

以下に掲載日とタイトル、登場者を書き出しました。

記事の内容は同窓会ホームページに掲載しておりますので、そちらをご覧ください。

5月8日掲載: ミッションナリー精神受け継ぎ、宇宙へ

古川 聡 氏	31期
山川 宏 氏	32期
安部正真 氏	34期
大嶽久志 氏	37期
戸谷一夫 氏	23期

5月15日掲載: 未知の地 恐れのないポジティブ精神

養老孟司 氏	4期
隈 研吾 氏	21期
広瀬通孝 氏	21期
今福龍太 氏	22期

5月22日掲載: 人材育成、先生たちも一流の経営者

大河原 毅 氏	11期
飯島彰己 氏	17期
藤原秀次郎 氏	7期
松信 裕 氏	11期
上田 涉 氏	47期

5月29日掲載: 学校批判 校長がほめる懐の深さ

青木盛久 氏	5期
--------	----

近衛忠輝 氏	6期
天野之弥 氏	14期
宮家邦彦 氏	20期
林 達雄 氏	21期

6月5日掲載: 「知りたい」とことん 最先端研究に

廣川信隆 氏	12期
梅津光生 氏	17期
瀨瀬一起 氏	22期
伊藤 啓 氏	30期

6月12日掲載: 異才のクリエイター、道開く時 醸成

保坂和志 氏	23期
神山純一 氏	15期
塩塚 博 氏	23期
中ザワヒデキ 氏	30期

6月19日掲載: 楽しむスポーツ 興じても力まず

桃井恒和 氏	13期
中村洋一郎 氏	27期
大住良之 氏	18期
川辺賢一郎 氏	48期

6月26日掲載: 漫画・映画・・・背中押してくれた「原点」

新井隆広 氏	49期
権八成裕 氏	41期
井川広太郎 氏	43期
小林晋一郎 氏	22期

7月3日掲載: 全力で突っ走れた あの時に感謝

浅尾慶一郎 氏	31期
和泉洋人 氏	20期
富野暉一郎 氏	10期
本田 博 氏	15期

栄光OBフォーラム@TOKYO 2015年11月5日(木)17:30開催

事業部

様々な分野で活躍されるOBに講演をいただく企画である「栄光OBフォーラム」は、これまで週末、大船で開催して参りましたが、どうしても近隣在住の方の参加が多い傾向がありました。

第7回となる今回は、東京近辺に在住、勤務している現役社会人の皆さんも参加しやすく魅力ある企画を提供することをコンセプトとして、「栄光OBフォーラム@TOKYO」と銘打ち、平日の夕刻より、東京で開催いたします。

東京駅の目の前丸の内に位置し、歴史的景観を保つ格調高い「日本工業倶楽部会館」において盛大に開催いたしますので、いますぐ、スケジュールの確保をお願いします。

第1部は「浅尾慶一郎が問う！ 栄光卒現役霞ヶ関官僚の本

音」と題したパネルディスカッションです。浅尾慶一郎衆議院議員(31期)をモデレーターに、日本の中枢を担う各省官僚による興味深い話が展開されますので、どうぞご期待ください。

第2部は立食形式の懇親会をご用意しました。ビジネスに直結する名刺交換も可能です。また、大学生にとっては各界で活躍する先輩に出会えるまたとないチャンスで、就活にも大いに活用していただけるはずで。さらには、母校新校舎建築の最新情報についても、設計監修の隈研吾氏(21期)他にご説明いただきます。

皆様、この機会をお見逃しなく、奮ってご参加ください。

- ◆日時: 2015年11月5日(木)
17:30~21:00 (開場17:00)
- ◆会場: 日本工業倶楽部会館
<http://www.kogyoclub.or.jp/>
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1の4の6
- ◆会費: 8,000円、学生3,000円
- ◆参加方法: 事前申込制(好評受付中)
10月25日(日)までに、以下の方法でお申し込みください。

(1) EACON(推奨) <https://eacon.alumnet.jp/>
「ログイン」→「イベント」

(2) E-mail admin@eikoalumni.org

(3) Fax 0467-44-8875

E-mail、Faxの場合は、お名前、期、現住所、電話番号を明記してください。

◆プログラム:

<第1部> 17:30~19:00

・オープニングメッセージ

和泉洋人氏 内閣総理大臣補佐官(20期)

・パネルディスカッション

「浅尾慶一郎が問う! 栄光卒現役霞ヶ関官僚の本音」
《パネラー》

戸谷一夫 氏 文部科学審議官(23期)

秋葉剛男 氏 外務省国際法局長(25期)

市川健太 氏 財務省理財局審議官(29期)

原 邦彰 氏 総務省自治財政局調整課長(31期)

《モデレーター》

浅尾 慶一郎 氏 衆議院議員 (31期)

<第2部> 19:00~21:00

懇親会(立食形式)

・来賓ご挨拶

・新校舎紹介

・70周年事業募金委員会からのお知らせ

・「青春スクロール」登壇者紹介

他、企画満載

主なご出席者(確定分のみ)

学校法人栄光学園 萱場 基 理事長

栄光学園中学校・高等学校 望月伸一郎 校長

学校法人上智学院 高祖敏明 理事長

徳永良輔氏 (1期、栄光学園創立70周年事業募金委員長)

大河原 毅氏 (11期、(株)ジェーシー・コムサ 代表取締役 CEO)

飯島彰己氏 (17期、三井物産(株) 代表取締役会長)

隈 研吾氏 (21期、隈研吾建築都市設計事務所 主宰)

崎山 茂氏 (25期、(株)日本設計第2建築設計群 代表アーキテクト)

EACONを使おう(3)

広報部

これまでアラムナイではEACONに登録された方がメッセージを送付したり、同期会などイベントの案内や出欠確認に使う機能を説明してきましたが、一部の学年を除いては、これらの機能を活用されている例はあまり多いとは言えないようです。そこで、もっと基本的な活用のためのご案内を行うことにしました。

EACONでは全同窓会員が事前に登録されています。登録されている内容はシステム開発当時の名簿情報に基づいているため、以前に名簿に印刷されていた内容が、そのままEACONでは表示されることとなります。これまでは同窓会事務局に連絡して名簿記載内容を更新する必要がありましたが、今後EACONを使うとご自身で更新することができますので、2年に1回発行される名簿の次の発行を待たずにEACON上の記載はすぐに変更しておくことが可能です。同窓会ではEACONと印刷物の両方の名簿情報を統合して管理しており、EACONを使わない場合でも現行の名簿の内容は維持されます。

今回はEACONに登録されている名簿情報の確認と公開の設定についてご説明し、その名簿情報の1項目としてメールアドレスの登録を推奨いたします。

まずEACONを開きます。イン



ターネットで下記にアクセスし、期委員から配布されたID番号と初期パスワード、または既にご自身で更新されたパスワードを入力してログインしてください。

<https://eacon.alumnet.jp/>

EACONの最初のページの左上に「ユーザーセンター」と書かれた箇所がありますので、これをクリックしてください。

ユーザーセンターとはログインされている方個人としてのメッセージの履歴や設定などを閲覧するページで、この右上に「プロフィール」としてお名前前が示されている欄があります。この「プロフィール」の文字の箇所をクリックしてください。



ここでご自身のプロフィールページが開きます。プロフィールは「基本項目」、「学歴・職歴」、「活動その他」の3ページの構成で、はじめに基本項目のページが開きます。

基本項目のページには名前、メールアドレス、住所、電話番号などの項目があります。これらの情報が正しいかどうかをご確認ください。また、ここにメールアドレスがすでに記載されている方は、EACONを通じてのメッセージをそちらのアドレスで受信されているはずで

住所等の基本情報を更新したり、メールアドレスを登録する場合には右上の「プロフィールを更新する」をクリックしてください。登録されている内容の公開の設定を変更するにもプロフィールの更新と同じ画面で行います。

プロフィールの更新画面では、姓名、メールアドレス、郵便番

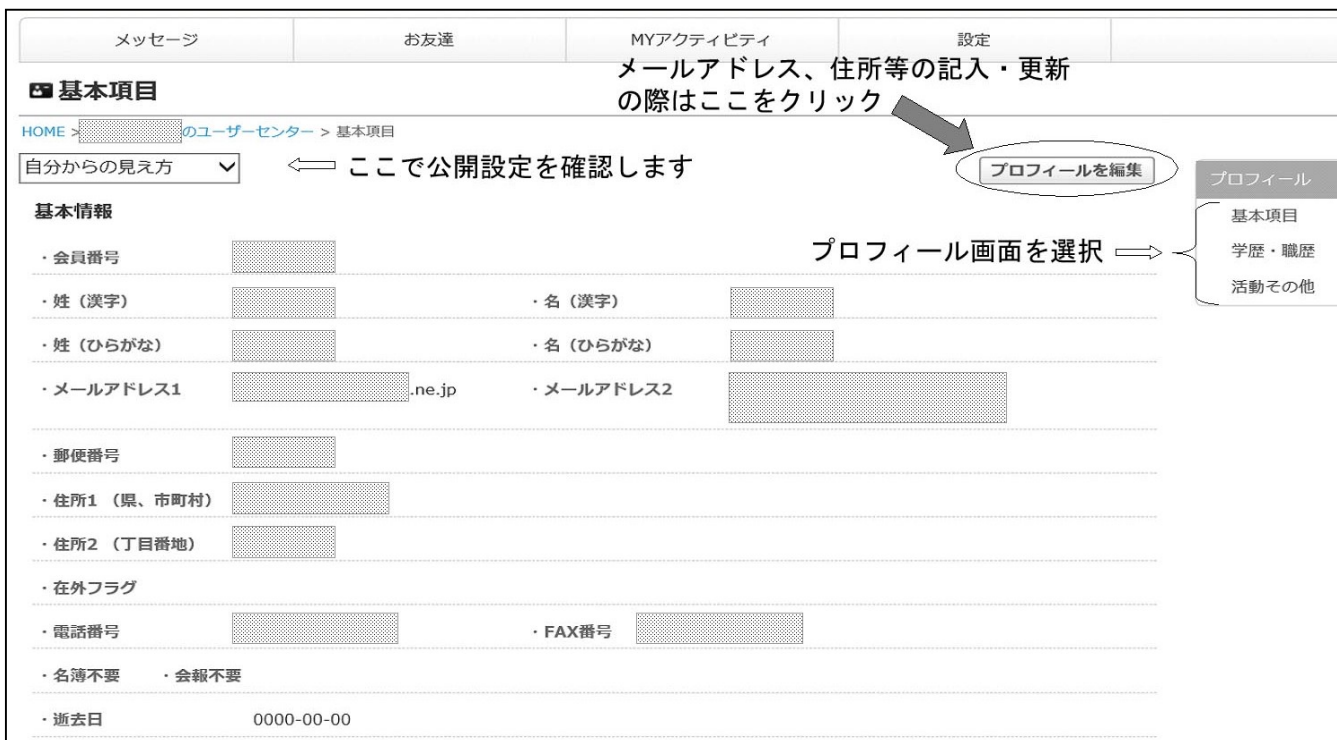
号、住所、電話、名簿の可否等をご自身で記入、変更します。記入後は必ず左下の「保存」ボタンをクリックすることを忘れないでください。このメールアドレス欄には2つのアドレスまで登録できますので、勤務先と自宅のそれぞれを登録しておくこと、EACONからのメッセージを勤務先でも自宅でも受信できるようになります。

ここで、それぞれの基本情報の項目記入欄の右にあるマークにご注目ください。これが公開の設定を示しています。

会員番号(編集不可)と氏名の右には青いマークがあり、これは常に公開される情報であることを示しています。本人の希望で非公開にすることはできません。

メールアドレス、住所、電話番号については公開設定の選択が可能です。選択肢は「公開」、「お友達とグループに公開」、「お友達に公開」、「指定したグループに公開」、「非公開」の5通りあります。

お友達とは同窓会員間で申し入れと承認を経て友達としてEACON上に登録した関係です。グループとは同期のグループや各支部等で作成されたグループを示します。ここで設定した基本情報の公開の確認のために、プロフィール画面では「自分からの見え方」以外に、「全体からの見え方」、「友達からの見え方」、「グループからの見え方」を選んで、どの情報が誰に公開されているかをそれぞれの立場として見てみるすることができます。例えば、「友達」でも「グループ」でもない「全体」に住所の番地だけは見せないとか、メールアドレス1は見せてもメールアドレス2は見せたくない、など確認の結果修正が必要であれば、再度プロフィールの更新画面に戻って設定しなおすこととなります。



基本情報と同様に、学歴・職歴のプロフィールも自分で修正可能です。ここで出身校の書き方はなるべく省略せずに正式名称で記述してください。学校名で検索する際に略称だとその学校名と合致しないことがあります。

活動その他のプロフィール項目は同窓会支部活動や学生時代の部活動を選択します。

以上でプロフィールの確認と必要であった場合の更新が完了しました。ここで登録いただくメールアドレスには、EACONでやり取りするメッセージが送付されたり、同窓会から会員全員にEACONでお知らせを発信する際にもお手元にメールが届きます。メールアドレスを登録されていない場合には、それらのメッセージやお知らせはEACON上には届いていても、ユーザーがEACONにログインした時に初めて着信に気付くことになるためタイムリーな対応が困難となります。これまで同窓会からののお知らせは郵送でお送りしていることがほとんどですが、EACONでお手元のメールアドレスにご連絡できれば印刷費、送料などを節約できるばかりでなく、例えばイベント直前にリマインドの連絡を行うなども可能になりますので、ぜひメールアドレスをお持ちの方はEACONに登録いただきたいと思います。

母校の様子

脳腫瘍と闘う在校生がファーストアルバムを完成 加藤 旭 君(66期、現在高1)『光のこうしん』

島崎裕之 (26期)

現役栄光生である加藤 旭(アサヒ) 君が、一昨年秋から脳腫瘍と闘っています。彼は私の次男の同級生であり、また私自身のバドミントン部の後輩でもあります。妻も彼のお母様とは親交があり、病状や治療の話は聞いておりました。

5月末の毎日新聞の記事で、彼が4歳から今まで480曲もの作曲を手掛けた少年音楽家であることを初めて知りました。彼の作品がCD『光のこうしん』として発売になり、売上金の一部が難病に苦しむ子供たちに寄付されると聞き、66期の母親、バドミントン部OB会等各団体組織を通じてご協力をお願いして参りました。

この度お母様から同窓会事務局にもお話をいただき、同窓会としても皆様にご協力をお願いする次第です。「自分も相手に喜ばれたい、何かの役に立ちたい」という彼の思いに応えることが、厳しい闘病生活が続く旭君とご家族様に対する応援

基本項目

HOME > ユーザーセンター > 基本項目

*は必須項目です

基本情報

- 会員番号 *
- 姓(漢字) *
- 姓(ひらがな) *
- メールアドレス1
- メールアドレス2
- 郵便番号 *
- 住所1 (国、市町村) *
- 住所2 (丁目番地) *
- 在外フラグ はい
- 電話番号 *
- FAX番号
- 名簿不要 はい
- 会費不要 はい
- 誕生日
- 卒業
- 緊急連絡先
- 緊急連絡先住所
- 緊急連絡先電話番号
- 緊急連絡先氏名

常に公開されます

お友達とグループに公開中

非公開にしてあります

事務局で入力しますのでご心配なく

最後に「保存」をクリック

学歴・職歴

HOME > ユーザーセンター > 学歴・職歴

*は必須項目です

職歴

- 勤務先名
- 勤務先住所
- 勤務先電話番号
- 肩書・業種・職種など

学歴

- 大学名
- 大学学部名
- 卒業年次

東大、早大等と略さず
東京大学、早稲田大学と記入願います

最後に「保存」をクリック

活動その他

所属していた部活動にチェック

部活動

- サッカー部 野球部 バスケット部 バドミントン部 バレーボール部 テニス部 硬式テニス同好会 硬式テニス部
- 軟式部 ソフトテニス部 体操部 卓球部 生物部 陸上部・陸上競技部 剣道部 コンダーフオーケル部 ポクラング部
- プラスバンド部 美術部 工芸部 物理部 生物研究部 山岳部 山の同好会 写真部 書道部 囲碁部
- 新曲部 雑貨部 『栄光』編集部 歴史研究部 郷土研究部 顕彰会 英語部 E.S.S. 演劇部
- 音楽鑑賞部 合唱部 音楽研究会 カトリック研究会 E.C.C. Eiko Magic Circle タバコクラブ同好会 ハードロック愛好会 ヒアノ同好会 フットサル同好会 ロックミュージック愛好会 大連楽同好会 可変部研究会 英語研究会

※選択に無い場合は、事務局にご連絡ください

企業・業種支部

- 栄光法曹会 公認会計士税理士栄光会 栄光医師会 横浜市立大学医学部栄光会 横浜留三浦栄光医師会 助産師栄光会
- 栄光建築士の会 清水建設栄光会 東京電力栄光会 三菱商事栄光会 三菱UFJ銀行栄光会 三菱UFJ信託銀行栄光会
- 明治安田生命栄光会 三井物産栄光会 東工大栄光会 栄光同窓カトリックの会 栄光OBゴルフコンペ 鎌倉CC栄光OB会
- 栄光AEROの会

※選択に無い場合は、事務局にご連絡ください

部活・地域支部

- 栄光横浜OB会 遠東栄光学園同窓会 茅ヶ崎栄光会 藤沢栄光会 北海道栄光会 横浜栄光会 岡山栄光会 鎌倉栄光会
- ニューヨーク栄光会 バリ栄光会 ハワイ栄光会 マニラ栄光会 シンガポール栄光会 インディアンクラブ 栄光学園
- 創道部OB会 栄光学園山岳部OB会 栄光学園軟式卓球部OB会 栄光学園バドミントン部OB会 サッカー部OB会 生物部OB会
- 物理部OB会 プラスバンドOB会 栄光同窓カトリックの会

※選択に無い場合は、事務局にご連絡ください

その他支部

期委員の方はここにチェック

同窓会活動

- 会長 副会長 事務局長 事業部長 常任委員 委員 財務委員 H.P.委員 期委員 支部委員 支部委員(事務局)
- 監事

※選択に無い場合は、事務局にご連絡ください

最後に「保存」をクリック

でもあると思います。是非皆様方にも彼の作品をお聴きいただき、また友人・知人等の皆様にもご紹介いただければ幸いです。

そして旭君が是非とも病を克服し、元気になることをお祈りいたします。



加藤 旭 の情景 ～幼少期のピアノ作品集～『光のこうしん』

作曲:加藤 旭 ピアノ:三谷 温 定価:2,000円(税込)

購入はこちらから

(社)アーツプレッド <http://mit-on.com>

またはFAX:03-5539-3654

※CD売上の一部は、難病で苦しむ子供たちに寄付いたします。
発送手数料(全国一律800円 ※沖縄、一部離島を除く)

CD題字、ジャケット写真は作曲者本人によるもの。

題字:2005年7月6日(5歳)、ジャケット写真:2014年4月5日(14歳・中2) 座間谷戸山公園

母校のダブルダッチ・チームがDDC世界大会(7月、パリ)に出場！

広報部

昨年、Double Dutch Contest 2014のU-19 パフォーマンス部門で世界チャンピオンに輝いた母校の体操部ダブルダッチ班が、今年も同部門で2位に圧倒的な点差をつけて日本一となり、7月26日にパリで開催された世界大会への出場権を得た。

昨年のチーム"Royal Vogue"の快挙は既報の通り(会報No.82号(2014年秋))。12月にはNHK Eテレ「スクールライブショー」のダブルダッチ特番にも出演した。

今年の新編成のチーム"Royal Frontier"(大会当時は高2(64期)、高1(65期)、中2(67期)の3人チーム)で、3月21-22日に東京で開催されたDouble Dutch Contest Japan 2015に出場。みごと、2年連続の日本一となった。



5月9-10日の栄光祭では、高校校庭で"Royal Vogue"と"Royal Frontier"を含むダブルダッチ班が華麗なデモを披露した。



チーム"Royal Vogue"のデモ。

64期(高3)2人、65期(高2)1人の3人チーム

7月26日の世界大会では、チーム"Royal Frontier"はU-19 パフォーマンス部門に世界から参加した15チームの中で健闘。第3位という好成績を残した。



チーム"Royal Frontier"の演技 (C)DDCW2015 GALLERY

早くも学園では、Double Dutch Contest 2016に向けた練習が始まった。今回は2チームが参加する予定とのこと。

"Royal United" 65期(高2)、66期(高1)、67期(中3)、68期(中2)の4人チーム

"Royal Brain" 全員67期(中3)の3人チーム

「学園通信」より

内山正樹（9期）

今号では、冬から春にかけての部活動を中心とした、課外活動での栄光生の活躍ぶりを紹介します。

1. 全日本中学校英語弁論大会 準優勝

12月によみうり大手町ホールで行われた高円宮杯全日本中学校英語弁論大会決勝大会で、中3(66期)中嶋勇太君が準優勝を遂げました。以下感想の一部です。

—————*—————*—————*—————*—————

66期 中嶋勇太

全国大会出場を目標にスピーチの練習を進めていくと、スピーチをするということは自分の思っていた以上に難しいことに気がつきました。人前で喋ることがあまり得意ではなかった僕には、壇上で大勢の観衆の前に身振り手振りを交えながら大きな声で喋る、というのはとてもハードルが高かったのです。

そこで、先生にメンタル面についても一から指導して頂き、聴衆がいる前でスピーチ練習を繰り返すうちに、徐々に精神面も進歩し、舞台上でもさして緊張せずにスピーチができるようになりました。

そしてテープ審査を経て迎えた県大会では、多少緊張し、また制限時間が気掛かりで少し早口になってしまったものの大きなミスもなく準優勝し、中央大会に駒を進めることができました。

それから2ヶ月間、さらに磨きをかけて臨んだ決勝予選(関東)大会は、県大会よりも格段にレベルが上がっており、数々の素晴らしいスピーチを聞いて思わず感嘆してしまいました。自分も非常に緊張したけれどいいスピーチが出来、勝てるかどうか不安でしたが、なんとか関東代表の6人に選ばれ、目標だった全国大会に出場する事が出来ました。

いざ全国大会の場に立ってみると、「全国大会に出なければならぬ」という責任からの解放感からか、一番の不安要素であった時間制限が無くなったからか、全く緊張せず不思議と腹を据えて堂々とスピーチをする事が出来ました。

結果はなんと準優勝で、結果発表の時は予想もしていなかったような素晴らしい結果に驚嘆しました。今考えてみても、僕のような未熟者が準優勝だなんて、と畏敬の念で一杯です。このような立派な賞を頂いた以上、英語にもっと触れ、もっと使いこなせるようますます勉強に励みたいと思っています。

—————*—————*—————*—————*—————

2. 囲碁将棋部 県大会団体戦優勝

高校将棋部は神奈川県高等学校総合文化祭将棋大会団体戦で参加64チームの中見事優勝しました。また、個人戦では淵上偉心君(65期)が勝ち上がり、県代表として全国大会に出場することになりました。

中学将棋部も神奈川県内すべての小中学校が参加する県小中学校将棋大会(冬季大会)団体戦で優勝しました。

3. 英語部 全国高校生英語ディベート大会優勝 世界大会へ！

英語部ディベートチームは2014年12月に浜松市の静岡文化芸術大学で開催された英語ディベート全国大会に参加、都道府県予選を勝ち抜いた64校の中を勝ち進み、宇都宮高校との決勝戦を制し史上2度目の優勝を果たしました。4人のチームで、総括スピーカーを務めた板部泰之君(64期)の大会報告の一部を紹介します。

—————*—————*—————*—————*—————

64期 板部泰之

OBや高三の先輩方は、お忙しい中我々の為に頻りに来て下さり、御尽力頂いた。未だ追いかけていたその背中は遠く感じられ、到底追いついたとは思えないが、この全国大会の結果、そして世界大会への取り組みや戦果を、少しでも感謝の印として受け取っていただければと願う。

英語部に入ると決めたときから今まで、見守ってくれた家族。顧問の宇佐美先生、クーム先生、小池正克先生、担任の石川先生や小泉先生をはじめ、御尽力頂いた先生方。応援してくれた同級生、後輩たち。皆には送るべき感謝の言葉が見つからない。同時に、周りの支え無くして成果を出すことはできないのだという事を、身を以て思い知ることのできる総括スピーカーという役職についていて良かったと心の底から感じている。

英語部の後輩だけでなく、この記事を読んでくれる後輩たちには、自分の視野を広げ、学園生活では多くの出会いの場を持つようにしてもらいたい。私自身、全くの偶然と周りの人々の御厚意があつてこそ英語部、ディベートとの、そして多くのかげがえのない仲間との出会いを果たした。部活というカテゴリーに拘らずとも、栄光では多くの体験の門戸が開かれている。興味のあることには積極的に参加し、多くの友を作り、自分の幅を広げてほしい。

ここぞという所での栄光生の集中力、自分の秘めた力を信じていてほしい。栄光生たるもの、土壇場の集中力は阿修羅すら凌駕する。最後の最後になって、我々の力は急激に伸びた。実力を発揮するためには、自分で自分をゾーンに持っていく術を持つことが肝要である。

自信、仲間への信頼感、そして睡眠の重要性への自覚は、その鍵になるはずだ。

さて、優勝の副賞として、我々栄光学園チームは日本代表としての世界大会の出場権を頂けることとなった。

世界大会となると、ディベートの形式が変わるだけでなく、テーマも世界規模のものが選ばれるようになり、発想もグローバルな視野に基づくものが要求される為、基礎知識を蓄える段階から英語表現を磨く段階、印象に残りやすいスピーチ術を身につける段階まで、何段にも及ぶ相当な準備が必要になるこ

とが予想される。いずれにせよ、願つても手に入れることのできないこの機会は最大限生かし、吸収できるものは吸収し尽くす所存である。参加するだけで終わらせはしない。会場や日時など詳細は未定とのことだが、いずれ再びこの学園通信の紙面を割いて頂いて経験を分かち合うことができればと願う。その時には胸を張って凱旋報告をさせて頂こう。

————*————*————*————*————

4. 体操部 ダブルダッチ全日本大会中高生部門優勝 世界大会へ！

体操部ダブルダッチ班のメンバー3人から成るチームが全日本大会の中高生部門に参加し、曲に合わせて演技を行うパフォーマンス部門で優勝し、7月にフランスで行われた世界大会に出場し3位という好成績を収めました。

チーム最年少の佐藤翔太郎君(66期)の感想(全日本大会優勝時)の一部を紹介します。

————*————*————*————*————

66期 佐藤翔太郎

前日の予選では、パフォーマンス部門でミスが多発して、スピード部門でも練習よりも遅いペースであったため本選出場はパフォーマンス部門、スピード部門ともに絶望的だった。そのときは一緒にチームを組んでくださった先輩方2人にただただ申し訳ない気持ちでいっぱい、またとても落ち込んでいた。しかし、結果発表の掲示板を見るとそこにはなんと**ROYAL FRONTIER**と書いてあったのだ。しかもパフォーマンス、スピードともに。その瞬間私のテンションはとて高くなった。その晩私は興奮して一睡もできず・・・というわけではなくぐっすり眠ることが出来た。

そして迎えた本選当日、私は渋谷公会堂の異様なテンションに圧倒されていた。スピード部門では残念ながら途中で引っかかってしまい、結果は5位だった。パフォーマンス部門では、技がきまって歓声上がるたびにニヤツキが止まらなくなり、また跳んでいてもとても気持ちがよかった。(と言っても先輩方がすごいのだが・・・)

出来栄は数か所ミスしたものの、前日の予選よりはるかに良かった。そして迎えた結果発表、自分的には、ミスをしていたので2位か3位に入っていれば上出来だと思っていたが、2位と3位のどちらも自分たちのチームではなかった。1位の発表の時、まだ強豪チームが呼ばれていなかったため、もう無理だと思っていた。しかしそこで呼ばれたのは「**ROYAL FRONTIER**」。そう、自分たちのチームである。そして私の喜びは大爆発したのである。その時の興奮は今でも忘れられない。

最後に、私たちを優勝まで導いてくださった古賀先生と、まだ中学生の自分と一緒にチームを組んでくださった増馬先輩と市川先輩には心から感謝をしています。ありがとうございます。

次は7月にフランスで行われる世界大会に向けて全力を注ぎたいです。

————*————*————*————*————

5. 高校野球部 春季県大会準優勝、 春季関東大会出場

高校野球部は春の県大会で横浜隼人、向上、武相と強豪校に勝利し決勝に進出しました。

決勝では秋季覇者慶応高校と対戦し、2-5で惜しくも敗れましたが春季関東大会の出場権を得ました。

関東大会では初戦に千葉県の覇者拓大紅陵高校と対戦し、両者譲らず延長12回まで1-1となり、今大会から採用されたタイブレークの結果2-3で惜敗しました。

熱き栄光親父たち！

(父親のための聖書研究会活動報告)

島崎裕之(26期)

昨年秋号(No.82)にて『栄光ヒュッテ合宿』について始めて報告させていただいたが、その後さらに活動は活発化している。毎月1回定例の、萱場理事長による講義、祈りの他、今回は盛りだくさんになった活動内容につき、この場を借りてその一部をご報告させていただきたい。

1. 栄光祭(5月9日～10日)に初出店！

萱場理事長・日野俊一郎先生のご尽力により、今回『カリタス釜石』より『さんりくわかめっ!』、また女川の唐辛子、その他詩集・CD・手作りのコースター等を販売させていただいた。ご提供いただいた場所が正門前受付隣の一等地のテント。延べ30名の親父たちが声をあげて呼び込みを行い、『輪投げ』や『くじ引き』等のイベントを交え、なんと『さんりくわかめっ!』は1日目の昼過ぎには完売! その他の商品を含め総売上高は16万円を超えた。この売上金の一部は東日本大震災復興支援に活用される。



栄光祭の様子

現役サラリーマン等である親父たちは、勤務先の仕事と同じくらい(多分その倍以上)の熱意とパワーをぶつけへトヘトになるも、これだけ社会貢献できたという満足感が爆発し、打上がおおいに盛り上がったのは言うまでもない。

恩師のこと

スタール先生との再会

湯沢三郎 (6期)

2. 第2回釜石ボランティア(7月18日～19日)

一昨年実施しているが、今年は2年ぶりに2回目の実施。NP O法人カリタス釜石を通じ、6名の親父が参加。18日は隣町の『鶴住居(ウノスマイ)地区』のグラウンドにて草刈り及び石除去の作業、炎天下真っ黒になりながら汗を流した。

翌19日、筋肉痛に悩まされながらも3名は『平田(ヘイタ)地区』仮設住宅にて退出した部屋の新入居者を迎えるための清掃で、前日に引き続き汗を流した。残る3名は、『小佐野(コサノ)』地区の『お茶っ子サロン』にて入居者の皆様との懇談。年配者に加えお子様も見え、午後はカラオケと、和やかなひとときを過ごした。



ボランティアメンバー

今回の活動を通じてボランティア仲間の輪も広がり、今後のボランティア活動継続拡大の気運も高まった。

なお通常期は、毎月の午前中講義の午後、善行にある『聖園(ミソ)』子供の家に出向き、諸般の事情で親のいない子供たちと遊んでいる。多くの子供たちに『次はいつ来るの?』と聞かれ、子供たちの親よりやや年老いた年齢の親父たちも老体にムチを打ち、走り回っている。

3. 今後の活動予定

9月中旬には、昨年好評であった『栄光ヒュッテ』合宿、10月上旬の体育祭では、3度目の『綱引き』を予定している。また2月には1泊2日での黙想会を予定している。秋以降の活動については、改めて次号にてご報告申し上げたい。

人生で60年超ぶりの再会というのは滅多にあるものではない。

戦後欠乏のさなか、外人といえば進駐軍の米兵を見かけるくらい、革靴などクラスで一人、二人という時代。帝国海軍の面影を宿す田浦の栄光学園中学校に、好奇心と夢に満ちた180人の少年たちを迎えた教師のなかに、その人はいた。



リノ・スタール神父

リノ・スタール神学生、28歳。ブラジル人。「外人が日本語で英語を教える!」という驚き。その外見から少年たちの容赦ない感性がたちどころに捧げた尊称は、「さといも」。

92歳になった「さといも」師は、我々の面影どおりの姿で、日本への巡礼ツアーに同行した30名弱の日系ブラジル人と、昔の栄光中一生17名、上智大旧ポルトガル語科卒生8名を前に、ザビエル聖堂(四谷・イグナチオ教会)でミサを司式した。染井吉野は盛りを過ぎ辛うじてまだ八重桜が散りなずむ、2015年、春は4月11日(土)のことである。

「リノ神父様がツアーと一緒に訪日し、4月11日のごミサ後昔の生徒さんたちに会いたいと希望されています」とブラジルはロンドリーナ市のルシー・岡村さんから入った第1報から、6期の幹事(田中淳、浜田、小金沢、三春)は忙しくなった。先生はロンドリーナ市の日系人3万人を司牧する、日系社会のお父さんである。ミサ前後の日程が不明なまま段取りを決めかねている間に、スタール先生が教鞭を取っていた上智のポルトガル語科卒生が合流の意向を寄せ、「この際みんなで賑やかに」の成り行きになった。栄光、上智の両OBで土地勘のある鈴木(顕)が昼食会の場を設定し、ついでに当日の進行係も引き受けた。

スタール先生は我々が中一の時、1年だけであったが英語の授業を受け持ち、「多分昭和28年に横浜港から船で旅立たれ、栈橋から見送った」(田中文、蒲原) そうだ。先生によれば、ドイツ行きは貨物船で、ドイツの大神学校での勉強へ向かい、その後米国へ渡った。見送りは少人数だったようだ。先生は「襟の栄光の校章を示され、別れのテープはなかったなあ」とお互いに



リノ・スタール神父を囲んで(2015.4.11)

記憶が一致した。

昔の生徒が入れ替わりで先生と交わす昔話は、鴨居の夏季臨海学校、有志で行ったサイクリング、公教要理・・・。「サイクリングでは私が兄から借りた自転車が途中でパンクしてしまい、先生が自転車屋さんまで連れて行って来て修理した」(三春)。「公教要理で綺麗な御絵をもらった」(八木)、「スタールさんの部屋にゲームがあってよく遊んだ」(多数)など、中一生の思い出フラッシュは鮮明だった。

戦後の「勃興期貢献者」またの名を「後期高齢者」に並び始め、「如何に生きるかは如何に死ぬべきかだ」など、屁理屈だけが空回りしそうな我が同輩の目には、スタール先生の60数年の時空を超え、穏やかにして凜とした存在感は大きな励ましであり、喜びでもあった。

エジプト・コプトの伝承では「モーゼがイスラエルの民を率いて出エジプトを敢行したのは齢80歳だった」という。先生92歳のお元気さは伝承を納得させる迫力に満ち、全身から「75歳で老け込むのはまだ早いぞ」というメッセージを発していた。

ネパール・アンナマリア教会完成報告会と大木神父

新井 隆 (14期)

5月23日(土)に横浜の末吉町教会で、ネパール・アンナマリア教会完成報告会が開かれ、遠路九州佐賀県から、大木神父もお見えになり、関係者をはじめ応援・声援を送られた約70名の方々が集まり、今年90歳になられる大木神父を囲んで苦労話、思い出話、現状報告等々に耳を傾けられました。(現地でのイベントである献堂式は、昨年11月15日に、完成式は今年1月に行われました。)

報告会の第一部では、冒頭、35年ほど前に大木神父をポカラに尋ね、以降いろいろの支援を果たし、2009年に立上の「アンナマリア教会建設支援の会」の発起人の一人でもあり牽引役でもあった林好(14期)さんご夫妻の挨拶があり、教会建設時の設計を担当された山口洋一郎(13期)さん、現地工事の監督を三年間に渡ってご夫婦でポカラの現地に滞在してボランティア活動された氏家豊浩さん、ずっと会計を担当された飯沼修(17期)さんに対し深い感謝の言葉が贈られました。続けてその方々から、写真や動画を交えての活動報告がありました。

第二部では、大木神父から、ネパールでの30年間を振り返ってのお話がありました。

そのネパールでは、当初布教は禁止されていたが、ブラチャンドラという共産党の指導者が選挙で国王を追い出し、すべての宗教の平等が決まり、信教の自由が



お話をされる大木神父

訪れ、こうして神様が教会を建てる状況を整えて下さいました。教会の建設資金はポカラの会や栄光卒業生の寄付等があって、十分に賄えられ、信者でない卒業生からも、また、様々な宗教の方々の助けがありました。そのため、教会をカトリックのためだけに使う事は許されないと考えています。また教会建設の資金集めの初めのころ、十分でない資金の更なる寄付を求めて教会を回るつもりでした。しかし、その直前に帰国しなければならなくなってしまい、一度、教会建設をあきらめました。その時に栄光

の卒業生たちが、「これまで集めたお金もありますし、作りましよう」と体勢を整えてくれました。卒業生たちが組織的に動いてくれたので非常に助かりました。感謝しています。

他にも治安の問題や、建設資材が滞ったり、計画が見直されたりして、着工が遅れましたが、氏家さんご夫婦が現地に行き、孤軍奮闘で頑張って下さったので、ようやく完成しました。等々、30分ほどのお話がありました。

早朝、佐賀県伊万里のシトー会修道院を出発、羽田から横浜に直行し、この後14期生の同窓会に顔を出され、翌日には、また、昔からの知り合いの方々の会合に参加され、またとんぼ返りされるという超過密スケジュールをこなされる89歳の大木神父のお元気がお分かりになると思います。お歳を感じさせないそのお話は、準備もせずに語られたということでしたが、聖霊が語るままに話しました、というご本人のお言葉には、ネパールでの長期の布教活動に半生を捧げられた神父の強さの秘密を伺うことができました。

お話し前の休憩時間には、来訪された多くの方が大木神父を囲み挨拶を待つ人の列ができるほどでした。始終いつもの柔和な笑顔で時々冗談を交えて応じられていました。

また、4月26日に発生したネパールの大地震では、しっかりと設計・施工管理のおかげで、特に被害もなかったという報告もされました。

大木神父の半生記「大木神父 奮戦記」(小学館スクウェアより2011年発行)を執筆された江口美由紀さん(46期江口健太君の姉)のお話もありました。この本の中では、苦勞されながらご活躍になった大木神父のお姿が詳細に語られています。江口さんのコメントは、1月の完成式に参列された感想と大木神父の最新動向でしたので、以下ご紹介いたします。

“ポカラに到着したその日のうちに、教会を見学しに行きました。門の前に立ってまず目に入ってくるのは、鮮やかな赤い屋根です。ポカラは晴天のことが多く、教会の屋根は真っ青な空にととてもよく映えます。お御堂は八角形の個性的な形をしています。圧巻だったのが天井の木組みで、本当に精巧に組まれています。ここには山口さんと氏家さんの大変な苦勞があったそうです。

照明はどこか和風な雰囲気、周囲の色に溶け込んでしまう目立たない細い紐で吊されているため、少し暗くなると、まるで宙に浮いているかのように見えて幻想的でした。

この教会建設前にアンナマリア教会のお御堂として使われていたという場所にも行きました。こぢんまりとした落ち着いた雰囲気で、この壁に並んでいた十字架の道行きは、現在の新しい教会に移されています。翌日が完成記念式でした。お御堂は人でいっぱいでしたが、壁の上部にはガラスの入っていない窓があるため、非常に風通しが良く、人いきれでムツとするようなことはありませんでした。雨季でも快適に過ごせるのではないかと思います。



末吉町教会で来訪者と歓談される大木神父

ミサの後、教会の入口の脇にある金属のプレートについて、テープカットが行われました。ミサの最中、しみじみと感じていたのが、その場に大木神父と広島学園の倉光先生の姿がないのが残念だということだったのですが、そのプレートには、この教会が栄光学園の大木神父の尽力と、そして広島学園の倉光先生を初めとするポカラの会の協力によって建てられたというメッセージが書かれていました。お二人の姿はなくても、こうして名前が教会に刻まれ、後々まで残されていくことを嬉しく感じました。

教会は今ではすっかり完成して地域の信者の方々が集う場となっています。

大木神父とお会いし、お話を聞きながら、神父ご自身の信仰や、神父であること、そして厳しい状況にある人々のために力を尽くすことについて、とても強い信念をお持ちの方だと感じました。その信念こそが、30年間のネパールでの厳しい生活を支えていたのだと思います。清泉在学中からカトリックに興味をもっておりましたが、執筆後に再度大木神父の元を訪ね受洗しました。また、大木神父は最近、ニュースを見ながら戦争と平和について考察しておられると電話でもお聞きしています。単に「戦争はいや」ではなく、「戦争に訴えてはいけない。もうそういう時代ではない」と認識するべき。「剣を取るものは皆、剣で滅びる」という聖書の言葉の正しさを歴史が証明しています、というお話でした。“

大木神父が、終戦時海軍特攻隊回天の志願兵であったことは、大木神父を知る人にとっては既知情報ですが、今年は当時のことを知る方の特集記事や番組が数多く目に触れました。被爆時の広島におられ、市内で救助等の活動をされた神父のご体験は、貴重な歴史資料とも言えます。戦争とそれを乗り越えて神父になられた人生の大先輩に神が語った言葉は何だったのか。「わる」を自称する神父に、パウロと同じように「語りかけ」が何かあったとか想像します。機会を作って聞いてみたいと思います。

金子省治君を偲ぶ

元教員 青木利通

2014年5月20日。この日は、金子省治君と会った最後の日となりました。奥さまから、入院中で楽観を許さないと伺っていましたが、妻と一緒に南共済病院に彼を見舞ったとき、酸素の管を鼻につけた彼が「神さまに早くお迎えに来てくれるように祈っているよ」、と言われショックでした。落ちつかない精神状態でしばらく話した後、祈っているよ、病者の秘跡を授けてもらうように、と言って別れました。まさかこれが最後とは夢にも思わずに。



青木利通先生近影

8月下旬から10月半ばまで、私自身も入院の身になりました。10月12日の夜、奥さまから、金子が危篤状態であり、子どもや孫たちにみんな会い、喜んで、という電話がありました。そして14日に神の御許に召されました。

あの元気だった金子君がこんなに早く逝き、しかも残された私が入院中とは。通夜には妻と娘に参列してもらい、私は病室で静かに金子君のために祈りをささげ、彼との60余年を偲びました。

1947年4月、戦後の混乱と荒廃が続く時代、旧制の上智大学予科のクラスメートとして初めて金子君と出会いました。色白で分厚いメガネをかけ、いつも教室の一番前に座り、熱心に勉強していました。当時の上智は、小規模な大学で、1学年は100人足らずでした。2年目に彼は史学科に、私は英文科に進みましたが、史学科はたった3名、英文科は18名でした。従って多くの講義は一緒に受けていました。かまぼこ兵舎の学生寮に住む彼は、多くの時間を図書館で過ごしていたように思います。また、神田の古本街や、あちこちを歩き回るのが好きだと言っていました。大学祭の時に、一緒に「ヘンゼルとグレーテル」の人形劇をやったことが印象に残っています。役はなんと、私がヘンゼル、彼はグレーテルでした。

幸い一緒に栄光学園で働くことになりましたが、彼は大学院で研究を継続しました。勉強熱心な金子君は、栄光においても、教員の勉強グループを立ち上げ、種々のテーマについて一緒に学んでいました。グループの設立にあたって、「青木、一緒に来てくれよ」と言われ、フォス校長のもとに出かけて交渉したことが何回かありました。フォス校長と個人的に話し合うのがちょっと苦手な弱気な面があったのです。

史学科で、イエズス会士や信徒の教授と出会い、自らも学んだ彼はやがて洗礼を受け、カトリック信者となりました。カール・アダムの「キリストの真相」が洗礼を考えるきっかけだった、と言っていました。キリスト者としての金子君は、どちらかと言えば理

屈が先立っていましたが、やがて年を重ねるうちに、「神さまのお恵みだ」という言葉をよく口にするようになりました。信仰が内面的に深まり、すべては神の計らいであり、すべてを神に委ねるといふ温かい信仰へと変わっていったように感じます。

栄光を退職した後ですが、逗子教会で、信徒の聖体奉仕者という、病気や高齢のためにミサに来られない人々にキリストの聖体を配る奉仕をしていました。よく言っていました、「わたしが行くと、お年寄りがとても喜んでくれるんだよ。同じ時代を生きてきたので、戦争中のことなどの話が合うんでね」と。

彼は栄光学園、仲間の教職員、生徒、卒業生をととても大事にしていました。1970年の半ばごろから、世界中のイエズス会学校で、“Man for others”が教育目標に取り入れられましたが、彼はまさに人を思いやり、人に心を配る人でした。例えば職員会議などにおいて、教育や教職員全体を考慮に入れた筋をとおす発言が多々ありました。会議の席ではフォス校長に向っても臆することなく意見を述べていました。時には口が過ぎることがあり、何度かたしなめたこともあります。もちろん彼は、フォス先生は私心がなく、教育に献身しておられる点で尊敬していましたが、意見は意見としてはっきりと述べていました。

学園で就業規則を作成した時も、彼は教員代表として力を尽していましたが、感心したのは、いつも教員だけではなく、事務職員、購買部、工作係りの人たちへの配慮を忘れなかったことです。

栄光を定年退職した教員OBに対しても、共に働いた人々との関わりを失いたくないとの思いから白水先生や稲田順先生と協力しながら「春光会」を立ち上げたことは皆さまご承知のとおりです。

教員OBや卒業生、現役の教職員のために「鎌倉散歩」を企画実施したのも金子君でした。白水先生の協力も大き



OB向け特別授業「城塞都市「鎌倉之城」を歩く」
(2004-10-30)

かったと思いますが、必ず下見を行い、資料を作成していました。この数年は、歩くのがかなり辛そうだったので、鎌倉散歩を止めたら、と進言したこともあるのですが、「これは別腹だ(?!)」と言って、歩く辛さより、皆の楽しみ、喜びのほうを優先して考えていました。偉いやつです！

神の御許にある金子君に私は今もよく語りかけます。「金子、永眠とか言っただけのんびり眠っていないで、君の家族のため、栄光学園のため、君が大事に考えていた日本の教会のため、そして日本と世界の平和のために神さまと諸聖人に祈りを取り次ぐために歩きまわってくれよ」と。

特集：校舎建て替えに寄せて

空が近い。大地が近い。仲間が近い。

崎山 茂 (25期)

現在、鎌倉玉縄の丘の上にある校舎の建替えが決定され、設計者選定プロポーザルが行われてから既に2年が経ちました。この2年間には想定以上の工事費高騰をはじめとして数々の難問に直面し、当初のプロポーザル案から多くの設計変更を余儀なくされましたが、この拙文を書いている2015年9月1日、なんとか起工式を行うまでに漕ぎ着けました。現校舎は東京オリンピックが開かれた1964年に完成し、田浦から移転したものです。新校舎は奇しくも二度目の東京オリンピックが行われる直前の2018年に完成する予定です。

新校舎については既にご存知とは思いますが、これまでの3階建てに対して2階建てであること、木造の先進的な技術を取り入れた構造であることの2点に最大の特徴があります。実はこの発想の基となったのはプロポーザルの条件であった建設予算です。普通の設計では到底、限られた予算には納まらないと思われました。そこで、丘の上の地盤の良さや広さを最大限に活かし、同時に木造建築への補助金を獲得できる可能性も考慮して、この2つをコンセプトとした訳です。ところが実際に計画案を練るに従い、これらが栄光の場所や校風に最も相応しいコンセプトであり、コスト以上の福音を生むことが見えてきました。

他の学校には無い魅力を更に高めるために、広大で空に向

かって開かれた場所を最大限に活かし、少しの時間にも外に出て体を動かす環境、学校全体の活動がどこからも間近に見える開かれた環境と、豊かな緑に馴染む建物をつくることが可能になったのです。

空が近い。大地が近い。仲間が近い。

私達の計画案が多くの中から選ばれたのも、こうした効果が評価された結果だと思います。

ここ数年、東日本大震災をきっかけに多くの公共建築の建て替えが進んでいるように見えますが、実はこれらは高度成長期に建てられ、寿命が近づいていたために早晩建て替えが必要なものでした。栄光の新校舎計画は他校に比べてやや遅れたために震災後の工事費高騰の影響をまともに受けてしまいました。それに加えて日本の産業構造の変化も影響しました。高度成長期には就業人口の15%ほどもあった建設業人口が大幅に減少し、長期に亘る工事の人員確保が難しくなったのです。

私たちのプロポーザル案では2つのコンセプトに加え、段階的な建設により仮設校舎を用いずに建て替える計画としていましたが、工事費削減のためにも工期短縮が必須となり、体育館の建て替えも断念せざるを得ませんでした。しかし、こうした紆余曲折を経ても着工まで漕ぎ着けたのは、理事長をはじめとする先生方、隈さんをはじめ計画を応援して下さる諸先輩方、34期の岩村君、55期の吉岡君を含む設計チームの皆が、2つのコンセプトから生まれる建築の価値を正しく評価し、夢を共有できたおかげだと思います。

建築の設計を生業とする者にとって母校の設計を任せられるというのは特別な意味のあることです。多くの栄光OBが設計に



新校舎完成予想パース

従事される中から私達に任された光栄と責任を噛み締めつつ、これからの1年半全力を尽くしたいと思います。

(タイトルは同じく25期 石川英嗣君による学校説明会用パンフレットのコピーから拝借しました)



旧バスケットボールコートに建てられた仮設校舎は2学期から使用を開始しています

大船校舎に思いを寄せ、遙か田浦校舎を懐かしむ

武嶋俊行 (16期)

田浦時代と大船時代の両方を知っているのは13期～18期だけである。63期に及ぶ全卒業生の約1割弱を占める。中3の2学期から大船校舎へ移転した者として、その両者を比較してみたい。

通学路は、田浦の方が変化に富んでいた。商店街を抜け、工場の脇を通り、海沿いに進んだ。道は右左に曲がり、夏は日陰を、冬は日向を選んで歩いた。大船は観音様の下で右折すると、後は一直線。真っ直ぐで単調な登り坂を歩くのは簡単ではない。登下校時、脳裏に浮かぶ雑念に対し、通学路はどのように影響したのだろうか。

眺望も、田浦の方が面白かった。海上自衛隊の基地と向かい合う教室の窓から見れば、自衛艦が間近に見えることもあり、「内火艇用意」などと艦内放送が聞こえたりした。しかし、大船校舎の窓からはグラウンドと丘の緑が見えるのみで、特に感慨は湧かなかった。海辺に生まれ育った私としては、海沿いの田浦校舎が断然懐かしい。

校舎は、田浦の方が何棟も建ち並び、学園キャンパスの雰囲気や風情が漂っていた。しかし、中学校と高校がかなり離れており、中高の連絡連携が弱点だった。図書室も高校校舎にしかなく、理科室も別棟だった。ハード面では圧倒的に不便だったに違いない。

その点、大船の校舎配置は合理的だった。広大な敷地に自由に設計できたのだから、当然であろう。何よりも中学校と高校

が接続されたことが画期的だった。休み時間を過ごす中庭は中高で別々だが、廊下では繋がっていた。特に教員にとっては、同じ職員室で意思疎通も円滑になり、中高の壁がなくなったのが大きい。講堂と体育館を除けば1棟しかない校舎は、工の字型の整然としたデザインだった。ただ、何故か何となく物足りなかった。もっと無駄で無用な遊びの空間があってもよかったと思う。音楽室なども講堂裏のような周縁部に置かず、防音設備を施した上で、校舎内部に配置するというアイデアはなかったのか。昼休みや放課後に音楽を鑑賞するなど自由に音楽と親しめる文化空間が身近にあってもよかったと思う。

体育施設は圧倒的に大船の方が優勢だった。これも広大な敷地の有効活用の結果だが、自然林など一部に残せなかったのだろうか。空撮写真を見ると、まるで体育学校のような身体鍛錬もよいが、自然もかなり破壊している。旧海軍施設跡地利用の田浦とは経緯を異にするが、田浦の体育空間も決して貧弱ではなかったと思う。

今後、次期学園構想が再検討されるならば、敷地内の何処かに人工林を復活させ、緑豊かな日本庭園を作ったらどうだろう。茶道を必修にし、園内に茶室や松下村塾風の小舎を建てるのである。生徒が茶を楽しみ、自主ゼミを開き、林間の小径を逍遥して、悩める精神が安らぐ場を設けるのだ。田浦には、そのような隠れた空間と余白があったような気がするのだが、懐旧の夢想に過ぎないだろうか。

大船の新校舎には、機能一本槍でなく、道に迷って彷徨する生徒にも安らぎをもたらすだけの余裕と奥行きを持たせて欲しいと思う。

大船校舎の思い出～最後の2ヶ月間

飯野習一 (19期)

大船移転の翌春に入学して6年、その後教員として40年、合わせて10000日以上同じ校舎に通った。毎日記憶が上書きされていき、在学中のことは遙か記憶の彼方にかすんでいる。大船校舎は日常そのもの、あえていえば見飽きた場所である。そんな私の「校舎の思い出」は最後の2ヶ月間ということになる。

1) 現校舎をできるかぎり撮影して写真を共有したい高2(65期)有志のグループ、現校舎取り壊しと新校舎建設を定点撮影して発表したい高1(66期)有志のグループが発足した。仮校舎で卒業する65期生と新校舎を1年だけ使う66期生では考えることが違う。どちらも気持ちのいい生徒たちだ。



ドローンによる空撮

2) ニュースで話題になった「ドローン」(無線操縦の小型ヘリコプター)による校舎の撮影に立ち会った。動画と静止画。生徒が人文字で「1964」と「2015」をつくった静止画は生徒たちに配布される予定。

大船校舎の思い出

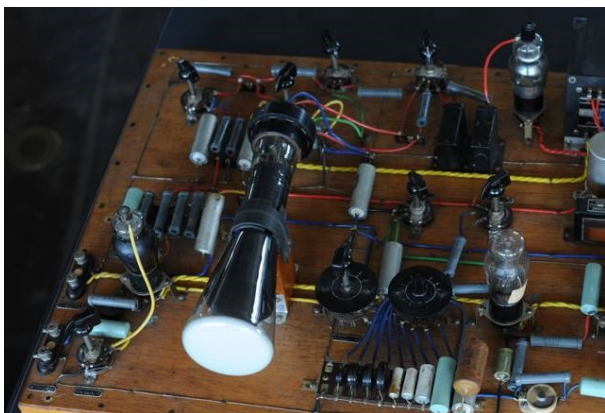
高橋正明 (19期)

3) 「黒板アートコンテスト」で校舎を扱ったすてきな作品がいくつも描かれた。写真を1枚紹介する。(次ページ)

4) 引っ越しの準備に明け暮れた。物理準備室には数千の「もの」があったから。有坂先生が作った(と思われる)、オシロスコープのバラックセットを改めて眺め、橋本先生のプリントを発見して「おぼけ回路(?)」を楽しんだ。装置の動作を確認し、修理し、梱包し、分解して処分品の集積所まで運んだ。夏休みをほとんど使ってしまい、大いに疲れた。でも楽しかった。

栄光大船校舎は、創立70周年を迎え新校舎へ立て替えとなるが、栄光の歴史を顧みると3度目の校舎変わりにあたる。田浦に入学し、翌年大船でまた入学式を迎え、大船で卒業した者にとっては、校舎は何か節目として特別な思い出となっている。

田浦からの移転は、私が入学した創立18年目の夏休みに田浦長浦湾に臨む旧海軍兵舎のリフォーム校舎から大船観音を越えた丘の上へ引っ越した。当時周りは、まだ宅地造成中で団地の雛壇が出来たばかり。大船観音からの真っ直ぐな道路が未開発だったため、駅から雨の日は坂道地獄に変貌する山道を迂回して歩いてようやく辿り着いた。



有坂先生が作った(と思われる)オシロスコープ

http://www.k4.dion.ne.jp/~iino/_mitaina/ に少し具体的な情報や写真を掲載します。



黒板アートコンテスト作品 左が現校舎、右に新校舎

ようやく講堂の裏あたりに至る山道を抜けると、広い大きなグラウンドとコンクリート造りの近代的な3階建て校舎が目飛び込んで来たのが印象的だった。グラウンドを見下ろすエの字型の校舎の長い横棒部分を中学生・高校生で左右に棲み分け、中央の縦棒部分が共用教室、短い横棒部分が特別教室群のような集合構造になっており、田浦の分散型再利用校舎と比べるとずいぶんモダンで重厚な合理的に設計された校舎に見えた。エの字の両脇のスペースが中高それぞれの校庭となるが、授業の合間にはハンドテニスコートと化し、中間体操などもここで号令がかかった。一度だけ授業中に有志で校庭に座り込んだこともあったな。校舎の階上からは遠くに丹沢の山並みが見える。校歌もこの字湾の波打ち際を通った「千里の波濤」から、緑なす相模野の野辺... に変わった。

その大船校舎も、移転から40年以上が経過し、近年大いに老朽化が進んでいると聞く。移転当時ピカピカだった校舎も、最近では雨漏りや旧式設備の限界、校内ネットワーク配線の不備などにも悩まされるという。時々用事があり学校を訪ね校舎内を歩くと、コンクリート造りの床や壁にも生徒達の手垢が染み込んでいてやはり年代を感じ、何故か校舎全体が小さく縮んだように思える。ちょうど立て替え時なんだろうと思う。

ざっと計算すると、この大船校舎からすでに7000人を超える卒業生が巣立った勘定になるのかも知れない。この校舎と共に大船の栄光文化が育まれたはずだが、田浦時代の質実剛健で生き延びるたくましさを引き継ぎながら大船第一期の校舎では何を学んだのだろう。さらに、今度の第二の新校舎のコンセプトには、また新しい思想が盛り込まれているようであるが、校舎と共にさらに新しい栄光の文化が育まれることだろう。楽しみであると共に、第一期校舎にご苦労さまで言いたい。

「大船1期生」という巡り合わせ

勝見 明 (19期)

我々19期は「大船校舎1期生」にあたる。それは晴れがましさと同時に、19期としての私個人の精神性には少なからず影響を及ぼしたように思う。一つには大船第1期は「田浦を知らない世代」を意味し、晴れがましさととは裏腹のある種の「引け目」を心の隅に生むようになったことだった。ピカピカの新校舎とは比べようもないほど、旧日本海軍の施設を使った旧校舎は「ボロ、かったが、田浦時代は我々には輝いて見えた。

入学後、折に触れ、田浦での草創期の話を聞かされた。それは、教師と生徒が共に汗を流し、学舎をつくり上げていく「創世記の物語」であり、逸話の一つひとつに心ときめかせ、その積み上げの上に築かれた学園に入学できたことを誇りに思えた。しかし、その裏返しとして、「遅れてきた世代」という、あらいような巡り合わせに負い目のようなものを感じざるを得なかった。

もちろん、創世記は昭和20年代の混乱期に入学したひと桁世代の話であり、ふた桁世代になれば、すでに相応の設備は整っていただろう。それでもなお、原初の記憶が残る学舎の空気を吸い、連続性の中で学んだ世代は、田浦時代の歴史に名を連ねる人々であり、18期と19期とでは1年違いであっても、非連続があった。

それは校歌の違いが象徴した。田浦時代の校歌の歌い出し、「千里の波濤を寄せ散るところ」はまさに、寄せくる荒波の中を船出して果敢に突き進み、時代を切りひらく息吹を感じさせるものがあつた。

一方、大船移転後の新校歌は「みどりなす相模の野辺」の歌詞で始まる。嵐の去った豊かな平野での新たな学びを想起させ、歌詞そのものは新校舎にふさわしいものだった。ただ、そこには一つの断絶があり、我々は先輩たちが高歌する「千里の波濤」を聞き、うわべだけは歌詞を口ずさみながらも、大声で心から歌うことのできない劣等感にも似た思いを感じたのだった。

その一方で、大船1期生は、もう一つの面でも、私の19期生と

しての精神性に影響を及ぼしている。それは公立中学校に進学した小学校時代の友人たちが学ぶ環境との歴然とした差によるものだった。真新しい教室、暖房のスチーム、物理・生物・化学の実験室、劇場みたいな講堂、きれいなトイレ、アンツーカーを始めとする競技種目別の施設……。それは田浦世代への劣等感を埋め合わせるように、外に向けて優越感を抱かせるものだった。

その優越感はやがて、内なる疑問へと転じていく。何のために、我々はこの恵まれた環境において「エリート教育」を受けているのか。折しも、大学闘争が高校へと波及してきた中で、疑問は学校の体制に対するアンチテーゼとなって表れる。新聞部に所属した私は学内新聞で学校批判を展開し(次号より発行停止処分)、友人のI君たちが高校3年時に敢行した集団授業ボイコットにも加わった。それは、栄光学園の弁証法的な発展において、第二世代だからならぬ運動として、自ら存在証明のようにも感じたものだった。

大船移転から50年以上が経ち、校舎が建て替えられることになった。田浦旧校舎と同様、大船旧校舎も過去の歴史の中に入る。やがてまた新校舎1期生を迎えることになり、次の新しい時代が始まる。同じ大船の地であり、そこに何ら断絶はないだろう。新しい世代には、先達たちの苦難と栄光の歴史を踏まえながらも、未来に向け、この学園のさらなる革新を担ってほしいと願ってやまない。

21期の禁じられた悪戯

広瀬裕敏 (21期)

グスタフ・フォス校長に六年間で三度呼び出された。

一度目は成績不振によるものである。入学から中学三年の一学期まで、違うことなく成績が落ち続けたのだからムリはない。

その後卒業まで低空飛行を続けたが、これは校長マターではないようで、この件では呼ばれなくなった。

二回目は、他クラスのAを自分のクラスの掃除箱に一時間閉じ込めるという悪質なイタズラによる。

直接の関与者ではなかったが、このイタズラを始めた記憶はある。やがて掃除箱をひっくり返したり、通気口で黒板消しをはいたり、自然に過激化していった。とどのつまりは放置プレーである。

反論の余地はない。ただ、掃除箱の中で我慢して同じ授業を二度聴いたAは評価があがった。

Aは、当時の学生運動余波の授業ボイコット中庭座り込み事件で、高一から唯一参加し譴責を受けた。

三度目はもつとくだらない。

高三のときクラスの窓から跳び降りるといふ他愛のない遊びが流行った。

これは私は首謀者でもなんでもなかった。南沙織か天地真理かといったアイドル論争と同じく、くだらない子供の遊びを横目で見ていた。

唯一畏友Hが跳ぶ準備をしていたとき、Hの髪を指に絡め數十本抜いたことがある。温厚なHは着地のあと、頭をちよっと押さえただけで怒りもしなかった。

そのうちサッカー部のセンターフォワードFが怪我をした。跳ぶ体勢のとき押されたそうである。

さすがに怪我人がでては言い訳も何もない。

Fとはもうひとつ校舎にまつわる思い出がある。

高三の時、帰宅時間にIと二人で美術室にいた。眼下にFが一人で歩いているのが見えて、ビニール袋に水を入れて彼に向かって投げた。

美術室は、体育館や中学校舎から抜ける道からかなり高く、Fに直撃はしなかったが、我々の笑い顔を見つけて、Fはダッシュで美術室まで駆け上がり怒り狂った。

もう我々も六十歳になった。

Aは医者になった。Hは医学部卒業後海外ボランティアに人生を捧げた。今でもアフリカのエイズ撲滅の活動をしている。Fは大手商社勤務のあと専門分野で重宝がられている。

そしてIは坂本龍一を世界に売り出した。ラストエンペラーにも出演し、そのギャラのスポーツカーでメキシコで早世した。

栄光の校舎というと、今でも美術室からIと交互に投げた水爆弾の放物線を思い出す。

栄光生になって45年、校舎は僕らの基地(base)であった

藤田英樹 (24期)

私たち24期生が、栄光学園に中学生として入学したのは、1970年(昭和45年)、卒業したのが、1976年(昭和51年)だった。入学年から考えると既に今年で45年が経過し、半世紀近い時の流れの速さに驚くばかりである。

私は、その1976年の3月に大講堂で举行された24期生の卒業式で、卒業生代表として挨拶をさせていただき榮にあずかった(国語の堀先生からのご指名だったと記憶している)。その拙い挨拶の中で、今でも私が鮮明に覚えている箇所は、「私たちがこの6年間慣れ親しんだ校舎ともお別れする日が近づいてきていると思うと全てが懐かしく、校舎の壁や教室や廊下の壁を徒然なるままについ撫でてしまう今日この頃なのでした。」というくだりである。これは多少の誇張があったかもしれないが、まだ多感であった当時18才の自分にとって偽らざる心境であった。壁をなぞると、俗に言う「走馬灯」のように、6年間の楽しい日々・苦勞した光景、導いていただいた先生方、ともに笑いまた泣いた

同級生たちの顔が巡り、蘇ってくる思いがしたのである。

私たちが入学した1970年と言うのは、実に印象的な年であった。大阪でEXPO70が開催され、そこには、「人類の進歩と調和」というテーマのもと、アポロ12号が持ち帰った「月の石」に象徴されるように、子供たちが好奇心いっぱい目をキラキラさせ胸を躍らせるパピリオンや展示が溢れていた。

私が初めて大船駅から栄光坂を登り、門をくぐり抜け、校舎群（12歳の子供には、まさに「群」として目に飛び込んできた！）を見た時、それは小学校6年生の受験前の見学時だったと思うが、まさに栄光の校舎や講堂、体育館、聖堂、グラウンドなどが大きな重量感と果てしない広さを持って、私にぶつかってきたのである。それは、私にとって「人生の可能性と夢」を大いに期待させる、ぼんやりとした形ではあるが、胸を膨らませる象徴的なできごとであった。

建築物・建造物というものには不思議なもので、とりわけそこで暮らし、過ごす人々の心のよりどころであり、まさにHomeとなっていくものである。

以降6年間、どの期の生徒にとってもそうであろうが、授業、テスト、掃除当番、中間体操、部活動、スポーツ大会、記念祭、体育祭・・・あらゆる日常や行事が校舎群と密接につながって、私たちの青春を紡いでいった。

入学して45年、卒業して39年、今、卒業生として栄光の校舎を語るとすれば、それは、HomeがいつしかBaseに発展し、私の人生の根っこになっているということである。校舎はやがて新築され、また数十年後には更に建て替えられていくのであろうが、Realな校舎も心象風景中の校舎も、それは幻ではなく、確かなタッチで、そこに存在し、私を或いは私たちを見ている。そして私も私たちもそれを仰ぎ見ているのである。

最後に、私の一番好きだった場所は「購買部」だった。そこまでダッシュで行く楽しい競争の瞬間、そこで補給する「エネ」は、私の文字どおり楽しみであり、エネルギー源であった。新しい購買部がどのような形態になるのか（そもそもあるのでしょうか？）密かに楽しみとしている。

修道院の記憶

角田 誠 (25期)

校門脇の藤棚を左に見ながら、旋回するようにさらに坂を上る。階段のてっぺんで一つ息をついて、僕は呼び鈴を押しした。

中2の夏のことである。

「ハイ」の「イ」にイントネーションがある低い声が出て、曇りガラスの扉の向こうに、待ち構えていたような影があった。レデスマ神父だ。

いつものように呼び出されたわけではなく、その日は、僕の方から相談をもちかけていた。多感な時期である。父との諍いを

どうしたものか、と。

廊下脇の応接間の布張りのソファをすすめられた僕は、苛立ちをそのまま言葉にした。

気持ちのどこかでは、励ましのひと言を期待していたと思う。だが、返ってきたのは父の肩を持つ意見で、いよいよ尖った幼い感情は、僕にこうまで言わせてしまった。

「家族を持たないあなたに、家族の相談をした僕が間違いでした」

長くはないが、深い沈黙があつて、神父は答えた。

「そうかもしれない。でも家族を持たないから、君のために、24時間祈ることができる」

修道院には裏庭に面した小さな聖堂があつて、卒業後、長い時間が過ぎてから、婚約式、妻そして二人の子の洗礼式を、その落ち着いた佇まいの中で挙げていただいた。さらには、母までが台所の仕事をさせていただくご縁に恵まれた。

ある日、母からこんなことを聞いた。

「神父様方は、修道院のことを家(いえ)っておっしゃるのよ」

そういえば、まだ幼かった子らを連れて母の仕事場に立ち寄ると、ウルフ神父やマギーニャ神父が代わる代わる抱き上げ、それこそ孫子のようにあやしてくれるのである。

遠い夏の日のレデスマ神父も、階段教室やサッカー場とは別の顔だった。父親の顔、とでも言えばいいだろうか。

学園を、迷える青春を、高みから見守ってくれた「家」は消えた。いや、十二所に移っただけであつて、なくなったわけではないのだが。

母の勤めは20年に及んだ。その間、何代もの院長様、副院長様にお世話になり、老いて退かせて頂く頃にはご迷惑ばかりおかけしてしまった。

今はホームで過ごす母を見舞うと、きまって

「私、忙しいの」

と言う。話を合わせていると、どうやらまだ修道院で働いているつもりなのがある。

その表情はひどく穏やかだ。母の記憶の丘の上には、イエズス会大船修道院が永久保存されているのだろう。

私も移設しておこうと思う。心の中の大切な場所に。

陽差しがあふれた、あの応接間を。

大船校舎の思い出

～赤レンガ校舎と修道院、そして草っ原野球場

武藤 豊 (26期)

この度、大船校舎がリニューアルされると聞き、現代建築の粋を集めた機能的なものになるであろうことはともかく、どこかで栄光らしさを残した温かい校舎になることを心の中で密かに期待し

ているOBとして、拙い一文を寄せることにしたい。

私は川崎の商店街に育ったせいもあるが、栄光が山の上であり、広大なグラウンドを有していたことに先ず惹かれた。文句なしだった。更に見学に行った日は素晴らしい晴天で、グラウンドもそうだが、赤レンガの校舎が実にお洒落に見えたのであった。「どこか違うな」、そんなわくわくする思いを少年だった私は抑えることが出来なかった。「どうしてもこの学校に入りたい」、小学校6年生の私は強く決心をした。そして、入学が叶ったとき、薔薇色の未来が私を待っているはずだった。

入学した私は誰よりも早く登校し、大きなフィールドのグラウンドで遊んだ。同じ川崎から行った阿部君とキャッチボールをしていたら、「まいて～」と言って、尾道君が老人のようにしわの多い顔を崩して近寄ってきたこの瞬間を忘れることは出来ない。早速、新しい友人が出来たのだ。少年の心は、既に有頂天になっていた。ひとしきり遊んで教室へ戻ると、眼鏡をかけた優しいおじさんが待っていた。それは担任のオギブンこと、荻野文梧先生であった。スペインの「アンダルシア」が好きで、白戸君にいつも「友達だよな～」と笑みを浮かべて機嫌をとっていた姿が懐かしく思い出される。穏やかで優しい方だった。「外人の先生に質問しておいて、後で僕に質問する。答えると、外人の先生はこう言いました、なんて言う。ああいうのは嫌いだな」と正直に仰る先生に心から尊敬と信頼の念を覚えた。

そして、忘れもしない出来事は入学して間もない6時間目の英語の時間に突然やってきた。荻野先生は英語の授業をせずに「外へ行こう」と仰った。そして、我々は体育館奥の広い草っ原へ歩いて行き、そこで、ゴムボールと細い竹の棒で草野球を始めたのだった。実に長閑で楽しい時間が流れていた。まだ、みんながそれほど打ち解けない頃に、こうしてみんなで野球が出来ることの素晴らしさ。「やっぱり、ちがうな」の印象は確信に変わったのだった。そして、私はあろうことかホームランを打ってしまった。何だか自分でも信じられない思いだった。しなる竹の棒が、柔らかいゴムボールを完璧にとらえていた。私は顔を火照らせて、そして若干の羞恥心をも感じながら、ダイヤモンドをゆっくりと回り始めた。幸福だった。しかし、その幸福はすぐに別のものへと変わってしまう。

なんと、セカンドベースを回ったあたりでチャイムが鳴った。そして、チャイムが鳴ると同時にみんなが教室へ帰り始めたのだ。「あれあれ、帰っちゃうの」そんな気持ちで私はサードベースをまわった。本来なら拍手で出迎えてくれるであろう仲間の姿は、ホームベースにはなかった。私は一人でホームベースを踏み、多くの仲間の背中をうらめしそうに見ながら、最後尾から歩き始めた。先ほどの有頂天はどこへやら、しみじみと人間は孤独なのだと感じていた。栄光学園、素晴らしい学校へ来てしまったと。

どういうわけか、その後、サッカーの遊びで高瀬君からのパスを決めて2ゴールしたりして、スポーツが得意なように見られたのも束の間、その後の私はたいいてい静かな静かな生徒だった。

あまり目立たず、おまけに成績も良くなく、どこかにコンプレックスを感じているような弱気な生徒であった。中3の頃は外部に出されそうになり、やっとの思いで高校へ上がると、担任の浅野先生とそりがあわずに留年しかけた。そこを救ってくれたのは兵ちゃんこと兵頭逸郎先生だった。赤ら顔の人懐こい先生は、26期と共に6年間を過ごしてくれた。「出た、兵頭の嘘！」等と良く仲村君が言っていたが、それは少し気の毒に思ったりしていた。何せ、学期末という私は修道院に呼び出され、兵ちゃんの説教を聞いていたのだから。「おっさん、どないすんの～」、こういうときの関西弁は妙に心に染み入るのだった。成績が悪くて呼び出されながら、何だか責められはせず、世間話をしながらじわじわと「どんな時でも諦めず、投げやりにならず、努力をしないとイケないよ」ということを、それなりに分からせるような説教だったのだ。今考えると、懐かしい時間だった。

赤レンガの校舎はグラウンドに面した姿も、中庭の校庭でゴムボールを校舎の壁にぶつけながら、次々と代わりばんこに打つ遊びや、校庭の一部を4等分して部対抗で行うハンドテニスの時も、僕らを優しく見守っていてくれた。「長野や長野～」と言いながらボールを繰り出す斉藤君が本当に不気味だったり、校舎に向かって全力でバックスイングをとり、近くの岡本君に手がぶつかりそうになりながら、満面の笑みを浮かべて思いっきりボールを打ち込む島崎君に驚異を感じていた。島崎君は「チクシマ」または「チクショウ」等と呼ばれていたが、どうやら今も昔も仲間思いらしく、この度も同期会再開に情熱を燃やし、ついに来年の正月2日に横浜のホテルでの開催にこぎつけた。ちなみに息子さんも我々の後輩なのである。親父として息子と共に母校に通う、それはまた新たな喜びに違いない。

まとまりのない文章は、そろそろ終わりにせねばならない。赤レンガの校舎が灰色のそれに変わったと、かつて聞いたとき、栄光らしさの何かが無くなったなど漠然と感じていた。別に灰色だろうがピンクだろうが向日葵のような黄色であろうがかまわないが、私にはそう思えた。赤レンガはどこかハイカラで神父の時代を思わせた。所謂、キリシタン時代にコレジオやセミナリオという教育施設があったが、そのようなことも想起する。そして、神父の先生方が目立たなくなり、栄光も普通の学校に変わってゆくのだなど、実情に疎いOBは漠然と思い、一抹の寂しさを感じていたのである。

校舎の思い出を書くはずが、どうも、断片的な思い出の羅列になってしまった。卒業後、上智大学へ進み、学内でフォス先生や富田先生をお見かけしたり、国文科でも松岡先生という神父が恩師となった。私は信者ではないが、どうも神父と子供という取り合わせに弱いらしい。

最後になるが、新しい校舎が素晴らしく、そして、どこかに温かみを持った建築物になるよう期待したい。そして、先生方には、優しいまなざしを忘れずに、時には生意気な生徒たちをご指導願いたい。OBの一人として、栄光の将来に、心から大きな期待を抱き、声援をお送りすることを約束して、拙文を終わる。最後まで

でお読み頂いた皆さん、ありがとうございました。

大船校舎の思い出

橋本英昭 (28期)

校舎の思い出について、28期として「なにか書け」と言われて引き受けたが、あれこれ薄れた記憶を辿ってみても、歩く大会で学年丸ごと迷子になった28期ながら、校舎にまつわるエピソードは思い当たらない。ロッカーの扉を、ボコボコに壊しまくってたヤツはいたが、良いものを残してもいないようなので、私個人の入学当時の印象を思い出してみる。拙文の中に皆さんにも懐かしんでいただけることがあれば、幸いに思う。

28期の中学入学は、大船移転から10年経った昭和49年春。校舎やグラウンド、講堂、体育館などあらゆる施設が一通り使い込まれ、こなれてきた頃だったかと思う。グラウンドの若い木々も既にしっかり根付き、枝を大いに繁らせていた。

その前年の創立記念祭に初めて栄光を訪れた私は、緑豊かで広大な敷地と近代的な設備に一目惚れしてしまう。なかでも、一面の緑の中に赤褐色のアンツーカーを敷いた本格的な300mトラック、その向こうに陽光も緑風もすべてを受け止めるがごとくゆったりと両翼を広げ、つややかな煉瓦色のタイルと明るい窓に彩られた校舎は実に美しくスマートで、折り目正しさとおおらかさが感じられる景色だった。小学生の目には、学園全体が精気に溢れた生きものの如くに見えていたようだ。私が通っていた小学校は鉄筋コンクリート校舎とはいえ、昭和5年の建築で内部はほぼ木製。床板には定期的に重油をモップで塗り、冬の暖房は石炭ストーブという校舎だったから、栄光が理想郷に見えたのも無理はない。かくして私は、身の程知らずにも栄光受験を心に決めた。

翌春なんとか入学してみると、校舎の中は一週間前まで小学生だった子供にはまったくの別世界。職員室とは別に事務室があるのも新鮮だったし、応接室がいくつもあったり、中棟の各階には「合併教室」という不思議な名前の教室や、「L・L」という意味不明の部屋もある。ここを通過して行く北棟はさらに大人びた異空間であって、各階には階段教室や化学、物理、生物の各実験室に準備室、美術教室、床がスロープ状の社会科教室や、何をするのかわからない視聴覚教室まである。加えて、理科各部や写真、新聞、雑誌「栄光」編集の各部室も並び、薄暗い地階には緊張感を強いられる購買部があって、その脇の文房具の匂いがこもる小さなホールには、昼になると牛乳屋さんやパン屋さんがやって来る。こうした専門分化した教室や部屋が揃っているだけでもアカデミック気分濃厚で、「栄光に入ったぞ」という子供じみた自尊心は、十分に満たされるのだった。

一方、社会科教室や視聴覚教室には田浦から持ってきたという、古めかしいデザインの鋳物と無垢の木でできた椅子と一体

の机があって、直線的で近代的な校舎との違和感も覚えた。合併教室の、武骨な木製の机と椅子も同様。全てが新しいわけではないことに、現実を知ったような気分でもあった。

それから早40有余年。歳を重ねるにつれ、栄光で過ごした時間や、そこで得たものは大変な宝物という思いが深くなっている。この宝物を得るに至る最初のきっかけは、あの美しい校舎の景色だった。役目を終えて消えゆくほぼ同世代の校舎と、それを作ってくれた方々、その中にいたすべての方々に深く感謝している。

大船校舎の思い出

～アロマのバックヤードで～

菅昌徹治 (43期)

栄光在学中、毎日見る校舎内のありふれた景色は、創立記念



祭(現在の栄光祭)の間だけ、普段とは別の装いになりました。今のようにパソコンやカラープリンターなどはなく、展示や飾りの作成は基本的に手書き・手作業で行っていたわけですが、正門から校庭、そして校舎の中は見違えるほど華やかな空間となり、歩いているだけで高揚感が溢れてきたことを思い出します。

毎年の記念祭では、いろいろな催し物を企画しました。例えば、教室の中に夏のキャンプの舞台である丹沢の山を再現しようと、学校の裏山から大量の枯葉を持ち込んで床にまき、終わった後の掃除が大変だったというような苦笑いしてしまう思い出もあります。こうした経験の中で、やはり一番印象深いのは、最後の記念祭に向けて高3の同級生みんなで行った「喫茶店・アロマ」です。

アロマ終了後の図書室にて(1994.5)

当時は、グラウンドを見下ろす校舎3階の真ん中に図書室があり、記念祭の際には本棚を脇に寄せて、喫茶店の店内として使っていたのでした。その年のテーマに応じて飾りつけをされた部屋の中は、大きな窓がたくさんある構造もあり、とても明るく

賑やかな雰囲気になります。その一方で、少し薄暗かった図書室前の廊下をベニヤ板で囲み、厨房や皿洗いのためのバックヤードスペースとして使っていました。

このとき、私は“コック長”(とは名ばかりで、実際は食べ物を電子レンジで温めてお皿にのせたり、プリンの上に缶詰の果物と生クリームを飾り付けたりするだけという“盛り付け長”でしたが…)という役目を担っており、数か月前から、同じグループの仲間と、冷蔵庫や作業台を廊下にどのように配置したら動きやすいかを考えるなどの準備をしました。そして、記念祭の当日、計画通りにいろいろな機材や食材が並べられた図書室前の廊下は、喫茶店本体である図書室にも増して、いつもとは全く違う、新鮮な空間になっていたように思います。

アロマが開店している土曜日と日曜日の昼間、私はこのバックヤードから離れる気になれず、ボーイ役が取ってくる注文に応じて食べ物や飲み物を作る一方で、在庫を管理して必要に応じメニューを修正してもらうという仕事をずっと続けていました。今から振り返って考えると、とても簡単な作業なのですが、もうすぐ別の道を歩むことになる仲間たちと、一緒になって何かを作り上げている、在学中で最高級の充実感があったことを覚えています。このたった2日間だけの思い出しかないのですが、図書館前の廊下が、校舎の中で特に心に残っている場所の1つとなっています。

卒業後、久しく記念祭(栄光祭)の時期に栄光学園を訪ねていないため、現在はアロマやそのバックヤードに、校舎のどの場所を使っているのかはわかりません。しかし、私が5月の春の記念祭の時期になると、折に触れてあの廊下のスペースを思い出すように、卒業生各位におかれても、それぞれアロマにまつわる校舎のどこかの思い出があるのではないのでしょうか。

パパ引退

新居進之介 (63期)

いつだったか、講堂で、映し出された新校舎の完成予想イメージを見て、私は何だか信じられなかった。家に帰るなり、「この人があなたの新しいパパよ」と言われたみたいな気持ちだった。あれはおそらく、創立記念式典で隈研吾氏が講演をされた時だった。あの時私は高校3年生で、「新しいパパ」の世話になることはないはずで、そう考えると変な話だが、私は妙に落ち着かなかったのだ。私にとってパパはたった一人であって、何を突然、といったところだったのだろう。

映し出された「新しいパパ」はカッコよかった。モダンな感じがして、スタイリッシュで、風の駆け抜けるような吹き抜けが爽やかだった。それを見て私は、タキシードを着たディカプリオが、や

あよろしく、なんて私に手をあげたみたいなきもちがした。

私にとって、「古いパパ」すなわち、私の慣れ親しんだ校舎は、長身のディカプリオの横で、幸福そうにニコニコと笑う、チビで小太りのパパだ。七福神の布袋さんみたいな優しい目で、たまにあくびなんかをするような。

「パパ」の床は私たちが外から持ち込む泥で、ほうきで掃いても掃いてももうす汚れて、ざらついていた。壁は剥げて、ロッカーは閉まったり閉まらなかったり。果ては震度5の揺れで倒壊するという、世にも恐ろしい噂がまことしやかに囁かれてさえた。

パパは私たちにあまり余計な手をかけなかった。放任主義というヤツなのだろう。エアコンのない教室は冬にときどき手がかじかみ、夏はフル稼働の扇風機がぐるぐるの首を回して、火照った足を机の鉄の足に押し当てれば、ひんやりとした感触が心地よかった。

そんなパパとの思い出で、私には忘れられない光景がある。遊びか何かに夢中になり、とっくに下校時刻を過ぎた後のがらみどりの校舎である。誰もいない、怖いくらいにひっそりとした廊下には、沈みかけた太陽の残光がほんのりと満ちていて、静寂の中ひとり温かな気持ちになったものだ。あれは彼の愛であり、その温かなまなざしだったのだと今となっては思う。

そんな日の、もう夜も迫る帰り際、振り返った闇の中の青白い校舎は、所どころに橙色の灯りが点っていて、なんだか見送ってくれているようでもあった。



在りし日の教室

もうパパはちょっとくたびれてしまったみたいだ。校庭を駆け回る、すばしこい小猿たちを抱きとめておくには少し年を取りすぎてしまったみたいである。最近では地震も多いし、ここ数年の夏の暑さはちょっと殺人的だし、仕方ないのかもしれない。

思えば、六年間を私はあの校舎で過ごしたのだ。当たり前のことだけれど、こういう今となってはなんだか感慨深い歳月でもある。かつて、あそこで汗みどろになって走り回っていた子猿の私も、パパはその太く優しい腕でいつも受け止めてくれた。その優しい眼差しでいつも見守ってくれていたのだ。

あれだけカッコイイ、クールなディカプリオと交代なのだから、
パパももう思い残すことはないだろう。その温かな愛の名残を、
未だ噛み締めることのできる今、お疲れ様、とただそれだけの
言葉を私は送りたいと思う。

OB便り

蘭新高速鉄道に乗る 蘭州近況その39(2015年5月)

大川 豊 (14期)

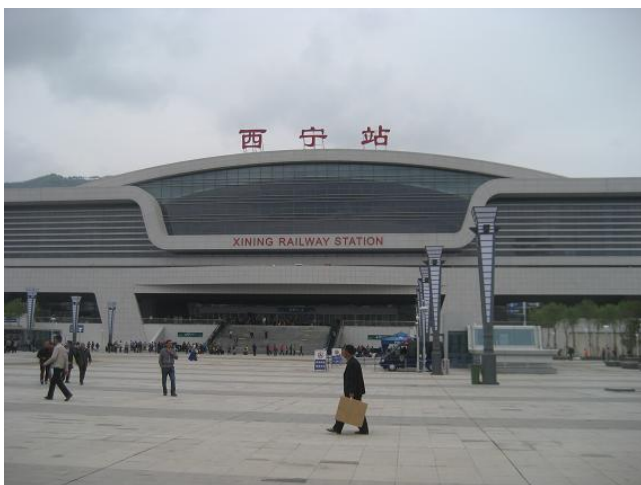
蘭新高速鉄道に乗る

昨年12月に蘭州から新疆ウルムチまで走る新幹線が開業しました。全長1780kmを11時間ほどで走ります。意外なことに、蘭新線は蘭州－西安線に先だって開通しました。これで、蘭州から敦煌まで7時間、新疆のハミまで9時間ほどで行かれることになりました。機会があればぜひ乗ってみたいと思っていましたが、5月の7、8日が大学の運動会で授業が無くなったため、思い切って出かけることにしました。



蘭新高速鉄道略図 蘭州－武威はまだ未開通

これまで蘭州から敦煌へ行くには、東西に延びる祁連山脈の北側の河西回廊を通りましたが、この新幹線は祁連山脈の南側、青海省の西寧、門源を通り、途中から祁連山脈を横切り、甘肅省の張掖へ出て、河西回廊へつながるといったやや変則



巨大な西寧駅 在来線、新幹線が共に

的なルートを走ります。今回は日程に余裕が無いため、祁連山

脈の麓の門源まで行ってみることにしました。門源とは青海省海北チベット族自治州門源回族自治县のことで、人口は15.6万人、海拔2870mにある高原の町で、祁連山脈に沿って大草原が広がり、7月には草原を黄色く染める菜の花で有名です。



達坂山の峠(およそ3800m)



門源回族自治县

新幹線の時刻表を調べてみると、門源へ止まる列車が少なく、ちょうどよい列車がありませんでした。そのため、往きは新幹線を使わず、在来線で西寧へ行き、西寧からバスで門源へ出て、帰りに新幹線で門源から蘭州へ戻ることになりました。門源のホテルは旅行社の友人に紹介してもらい、列車の切符とホテルの予約を頼みました。

在来線は蘭州から西寧まで2時間半かかりました。西寧駅は新幹線の開業にあわせて再開発され、巨大な駅に生まれ変わっていました。駅前にはバスターミナルもあり、だいぶ便利になりました。駅の近くのホテルに泊まり、翌朝、10時のバスで門源へ向かいました。門源までおよそ100km、料金は32元です。バスで門源へ入るには、祁連山脈の支脈の達坂山を越えて行きます。達坂山の峠は海拔3800mあり、つづら折りの山道を1時間ほど登ります。峠を越えると眼下の景観に圧倒されました。遠方に雪を被った祁連山脈が連なり、その麓に大草原が広がります。門源の町も草原の中にかすかに見えました。

西寧から3時間で門源へ着きました。さっそく予約したホテルを探して、チェックインしようとしたのですが、フロントで待たされました。しばらくすると警官が4人ホテルへ入って来て、私を取り巻いて、いろいろ尋問を始めました。そして、彼らが衆議した結果、許可書の無い外国人は門源に入れないので西寧へ戻るように言われました。せっかくなので、せめて1泊したいとねばりましたが、西寧へのバスがまだあるので戻るようにと、とりつく島もありませんでした。結局、警官たちにパトカーでバスターミナルへ送られ、切符を買って西寧へ戻りました。それでも戻りのバスの中で思案した結果、その日は西寧に泊まり、翌日再びバスで門源へ出て、予定通り、予約した新幹線で蘭州へ戻ることに決めました。



門源を走る新幹線

翌朝、また達坂山を越えて、門源へ行きました。新幹線の門源駅は門源の町から数キロ離れた郊外にありました。草原の中に駅だけがあって、周りにはまだ何もありません。駅の構内には売店すら見当たらず、駅の外に屋台の店が2、3件あったので、そこでビールとつまみを買って昼飯にしました。門源は普通駅で1日に数本しか列車がないようですが、待合室には数十人の乗客が待っていました。1時45分、定時に列車が到着し、無事乗車できました。列車は草原の真ん中を横切って走りましたが、すぐに達坂山のトンネルに入ってしまった。門源から西寧まで45分、西寧から蘭州まで1時間15分、距離はおおよそ300km、料金は普通指定席で88元でした。往きは2日でしたが、帰りは2時間で戻れました。これまで甘粛省は広大で、どこへ行くにも時間がかかったのですが、これでだいぶ便利になりました。中国の新幹線の乗り心地は日本の新幹線とあまりかわらず、快適ですが、ただ、窓枠の幅が広く、席によっては外の景色が見難いのが難点だと思いました。

日本語熱に陰りが?

例年6月に中国の全国統一大学入学試験が行われ、7月には結果が発表されます。ただ、残念なことに来年度の日本語科の



新幹線からの車窓風景

新入生は2クラスではなく、1クラスに減らされることになりました。蘭州大学の外国語学院では、英語科は数クラスあって一番多いのですが、2番目は日本語科かロシア語科かで競ってきました。しかし、今回ロシア語科に水をあげられました。蘭州大学のロシア語科は老舗で、卒業生はロシアに限らず、中央アジア諸国へもどんどん進出し、就職率も70%以上だそうです。それに対して、日本語科は40数%ほどで、英語科と同じ程度に留まりました。

最近の日中関係の冷え込みのせい、企業も新規の投資を手控えているようで、上海や北京の駐在員の人数も大きく減っているようです。また、これまで家族で来ていた駐在員も単身者が増え、北京の日本人学校では児童や生徒数が激減していると聞きました。そのせいで、せっかくな日本語を勉強しても、それを活かす道が少なくなり、卒業生の就職率を悪化させています。

また、蘭州大学では学部間の転部をある程度認めています。新聞学院という情報系の学部へは毎年日本語科から2人、3人と転部するようになりました。苦勞して教えた学生たちが転部すると少しがっかりします。中には、本人は残りがっているのに、親が転部を無理やり決めたという噂も聞きました。これも日本語への人気も衰えてきたせいでしょうか。

最近、日本語を勉強する学生に対して、お客様という意識を持つようにしています。日本語科の学生に限らず、アニメや映画が好きで日本語を勉強している学生も少なくありません。何かの機会ですうした学生たちが接触してきます。今までは日本語科の学生を優先していましたが、最近では、これらの学生へも努めて丁寧に対応するようにしています。日本語科の学生の減少は蘭州大学に限らず、他の大学でもあるようです。そろそろ日中関係の好転を願います。

5月のキャンパス

相変わらず花の写真を撮っています。4月は杏、桃、ライラック、梨などが目を楽しませてくれましたが、5月は牡丹と芍薬、バラ、

ハリエンジュなどが咲き誇りました。なかでも牡丹と芍薬が見事でした。牡丹は5月上旬、芍薬は中旬と咲く時期が違ったので、はっきりと区別ができました。牡丹は木、芍薬は草、また、葉の形が牡丹は八つ手のようで、芍薬は眉か唇のようです。牡丹は木ですから、株も大きく育ち、たくさん花が咲くと豪華です。花も大きいです。芍薬はすっと伸びた茎に牡丹のような花を咲かせます。ただ、株によっては大きな花を咲かせると、花の重みでお辞儀をしてしまうのが残念です。日本なら添え木をするのでしょうか。花ビラは牡丹も芍薬も一重と八重があり、同じですが、芍薬の方が少し小ぶりで可憐な趣があります。



ピンク系の牡丹



キャンパスの芍薬

6月に入って、芍薬も散り始め、終わりに近づいています。今は夏の花、バラ、ニワナナカマドが咲きました。また、立ち葵も芽を出し始めました。3月の中頃から始まった花の季節ですが、もう少し続きそうです。

春に撮ったたくさんの写真をPHOTOGETに貼ってあります。

<http://photoget.jp/index.html>

ログインをする必要はありません。

直接、写真部屋検索で「楡中の花」と入れると、5つの部屋が出て来ます。どの部屋もPWは「4444」です。

気に入った写真があればダウンロードもできますので、お好きな方はお試してください。

「いつ～、できるのかあ？
すぐに応えて欲しいのだから！」
“WHEN? R. S. V. P.!”

鈴木宙明（4期）

I. 朝日新聞神奈川版に毎週金曜日に連載されている『青春スクロール／母校群像記』の《栄光学園》篇が7月3日に終わった。9週続き、39人の同窓生が華やかに紹介された。その半数以上は、過日同窓会が行ったアンケートの中の「栄光卒の有名人」としては、その名が挙げられてはいない。

世に、母校(大はともかく、高・中・小)に関する「同窓生自慢」というならわしがある。格付けとはいわないまでも、母校の知名度やイメージのアップに有無を言わせぬパワーを発揮する。開校以来輩出した高名な芸術家・政治家・スポーツマン・芸能人・学者・経済人などを引き合いに出す。そのトップ御三家は《総理大臣／宇宙飛行士／ノーベル賞受賞者》といわれる。三つそろえばチョウ名門校となる。《栄光》の場合、まだ古川飛行士のみ、おいおい生まれるであろう。(しばしば栄光出と間違えられる元首相は、転校秘話が紹介された。朝日的スクープといえよう。)

この連載コラムの掲載目的には、受験生を持つ若い親層への新規読者開拓も窺えるが、人選にあたってのスタンスやバランスにはみるべきものがあつたと思える。私なりの不満といえば、《聖職者》を一人くらい入れてほしかったというくらいであろうか。

II. 《聖職者》を持ち出したのは、理由がある。40名近い同窓生の姓名が記載された9回のシリーズを通じて、なんと6回も登場する名がある。《グスタフ・フォス校長》である。担当の菅尾記者(静岡県立韮山高校卒)やデスクにとって、取材インタビュー中に繰り返してきたであろうカタカナの校長名は、あたかも《栄光》のアイデンティティの核のようにインパクト強く響いたことは想像に難くない。

因みに、連載の冒頭はこんなリード文で始まった。「栄光学園は戦後まもなく、カトリックのイエズス会神父たちによって設立された。使命感と好奇心を胸に未知の地に飛び出した(ミッシヨナリー) (宣教師)の精神を受け継いだ卒業生たちは、各界で活躍している」。それならば、せめて卒業生の中に一人くらいは、そのミッシヨナリー精神をストレートに具現しているカトリックの神父はいるかを取材し、伝えてほしかった。

III. フォス先生独自のパワーがきわめて大きかったことは衆目の一致するところであろうが、揺籃期の栄光学園と在校生にとって、教壇に立っていた多くのイエズス会の神父さんたちがフォス校長とともに放出した莫大で強烈なエネルギーを思い起こすことは易しい。「学園で薫陶を受け、警咳に接した外国人の先生のお名前を10人挙げる」ことは、特に田浦で学んだ卒業生にとっては、半世紀以上を経た今でも難しいことではないと思える。

IV. 以下は同窓生諸兄へのご提案です。

栄光学園の揺籃期に、そのアイデンティティ創成に大きく貢献し、日本の子供たちのために使命を全うされた、フォス校長をはじめとする先生方の人物像は、後輩に、学園に、具体的にヴィジュアルに、今も語り継がれているのでしょうか。

シュトルテ先生やウルフ先生を偲ぶ本は、ゆかりの同窓生有志によって、編まれ、出版されました。では、生徒から見たフォス先生は、ヘルヴェック先生は、エイレンボス先生は、そして……。

そこで目安として、田浦のキャンパスを経験した各期から編集委員を出して、感謝の心をこめて、あの頃学園で過ごされていた外国人神父さんたちを回想し描き出す《寄稿文集》のようなものを企画・編集・出版できないのでしょうか。できれば、同窓会の一事業として起ちあげて、一年かかりくらいのプロジェクトとして……。

いま、栄光学園も同窓会も学園創立70周年事業に精力的に取り組んでいます。そんな中、1期生、2期生は傘寿を迎え、田浦で卒業した世代の最後になる12期生も古稀を迎えています。まだまだ元気なうちに、できることはしておきたいものです。

V. あの頃いらっしゃった20人ほどの神父さんの姓のイニシャルを並べると、こんな八つの文字にほぼ収まりました。その先生がたから、出版催促の声が、早くもお国訛りの日本語で聞こえませんか。「いつ～、できるのかあ？ すぐに応えて欲しいのだあ！」

“ WHEN? R. S. V. P. ! ”

「(仮題)《寄稿文集》田浦時代の外国人神父さんたち」編集委員の募集

栄光学園同窓会

上の鈴木宙明氏ご提案の、田浦時代の外国人神父さんたちの思い出をまとめた寄稿文集の編集委員になってくださるかたを募集します。田浦の卒業生からの積極的な参加をお待ちします。応募の連絡は同窓会事務局まで。

admin@eikoalumni.org

電話/ファックス 0467-44-8875

齢80歳台で、スコア80台に挑戦

熊岡 醇 (1期)

去る7月29日(水)の梅雨明け猛暑日、年齢80歳の大台を超えた1期の3人(徳永良輔、小島恒雄、熊岡 醇)は、徳永君のホームコース芙蓉カントリークラブで、80台のスコア(あわよくばエージシュート)を目指して、猛暑の中、老骨に鞭打って、果敢にチャレンジを試みました。

結果的には、80台のスコアには、僅かながら(?)届きませんでしたが、熱中症で救急車で搬送されることもなく、1Rを何とか



芙蓉CCにて1期の3名(2015.7.29)

廻りました。午後2時にあがりましたが、早いし、キヤデイさん付の電動カートでのラウンドでしたので、もうハーフとの声もありましたが、さすがに年齢を考えて断念致しました。

達成感、充実感、満足感が得られた1日でした。神に感謝!!

同期会活動

栄光学園一期生同窓の集い

前川 卓 (1期)

「一期生同窓の集い」は、会員の要望を汲みつつ、3年に1回だったのが2年に1回になり、今回は昨年に続いての開催となった。実施時期は今年も気候のよい5月14日(木)を選び、場所はこれ以上足の便のよいところはないと思われる大船駅ビル「ルミネ」最上階の「AGIO」での開催となった。参加者は昨年より2名減ったものの、24名の大盛況となった。

会は元気者の熊岡君の司会で開始され、先ず、この一年の間に天に召された白岩君と石井君の冥福を祈って黙祷を捧げた。石井君は、前回、病を押しての参加であったが、當眞先生への思いを切々と語り、一見元気そうに見えていたので、まさかとの思いで一杯である。

乾杯は、久しぶりの参加となった島森君の発声で行われ、再会を喜び合い、殆どが傘寿を過ぎた一同の健康を祈念した。島森君は、書店の店主としてまだまだ現役であり、今回は久々の再会となったが、好青年の風貌は殆ど変わっておらず、年齢相応の病歴をお持ちのようだが、一期生の中では数少ない現役と



一期生同窓の集い(2015.5.14)

して、元気で頑張ってもらいたいものである。

有賀君は余りに久しぶりで、風貌が私の持っていた印象とは違っていたので、失礼ながら名前を確認させていただいた次第である。でも、そのスリムさと若々しさは昔を彷彿とさせるものがあり、うらやましいかぎりである。今回は、昨年の会の記事をALUMNIで見ても参加したと聞き、執筆者として感謝に絶えない。

高橋君は何回目ぶりかの参加。何年か前の年賀状ではハワイ大学に出向いているとあったので、元気なものばかり思っていたのだが、時々不調を来すとのこと、健康には是非気をつけていただきたい。鶴久保からの同級生は高橋君、白石君、小笠原君と私だけになってしまい寂しい限りだ。

幹事役の小笠原君は、膝の不調により長年苦しむ中、今回は奥様の介添え付きで車椅子での参加となった。重い写真機は置いてくればいいのと思ったのだが、使命感にあふれてか持参してきてくれた。本当にご苦労様でした。何よりも膝の全快を祈っている。

超遠方からは、米国から仁科君、そして山梨からは安土君の出席があった。長時間かけて出席してくれた両君には少ししゃべり足りなかつたのでないかと常々気になっている。また会いましょう。

今回は、常連の面々のことに関しては省略させていただくこととし、体調が気がかりである不参加者のことについて、返信葉書などをもとに少し紹介させていただくこととする。

会田君は寝たきり状態かと心配していたが、数年間の薬害が残っていて今回は欠席するが、年相応に元気です、とのことで安堵したところである。

菱沼君は、病気療養中だが、回復して会える日を楽しみにしている、とのこと。我々も皆、元気いっばいの君の顔を見るのを楽しみにしている。

腰痛、神経痛などの持病があり、調子がよければ出席できるが、今回は不調につき欠席すると言ってきたのが内田君、内山君、松戸君である。私も脊柱間狭窄症。痛いのはいやなものである。来年は再会できることを願っている。

急な手術ということで皆が心配した元気印の徳永君は「順調に回復しているが、今回は仕事での欠席」であるとのことであった。よかった、よかった。でも、無理は禁物と言うことをお忘れなように。

皆が元気を取り戻し、再会できることを祈って止まないところである。

最後に、橋本君と小笠原君のカメラで集合写真を撮り、高橋君の先導によって再会を期しての一本じめを行って解散となった。

世話人から、次回は栄光学園創立70周年に合わせて再来年開くということが提案されたが、来年もやれとの声が上がったので、事後ではあるが世話人会を開き、審議の上その声を尊重することとなった。

2016年5月17日(火)13時30分から、今回と同じ大船駅のルミネ7階の「AGIO」を予約したので、同期生各位はご予約下さるようお願いしたい。

二期生傘寿同期会

大石 進 (2期)

2015年5月15日正午から、横浜シティクラブで、傘寿を祝っての同期会を開催した。昨今、会合は昼間に開くことにしている。現存会員数65名中参加者31名。この出席数をどう評価するか、微妙なものがある。

41名が参加した三年前の喜寿同期会以降、9名の仲間が他界している。会は追悼の黙祷から始まり、和気藹々の時を過ごして、田浦時代の校歌「千里の波濤」と愛唱歌「Pirates Song」で締めくくられた。「Pirates Song」は二部合唱で歌われる。フォス、ヘルヴェク、シュトルテ三神父の感化である。写真で見る限り、参加者は皆、矍鑠たるものである。しかし、病院がよいに費やす時間はそれぞれに増えているし、病床に伏し

ている仲間も多い。

転校者の多い時代であった。また、結核のために安静を強いられ、一期からの原級留置者、三期への原級留置者も多かった。結局のところ、入学時150名近くいた二期生は、卒業時91名に減っていた。そしてこの会までに33名の仲間を失っている。

食糧難の時代、学友の弁当箱に目をやるのは御法度と心得ていた。遠足やら海の合宿でおやつに配られるチョコレートの半片がなによりのご馳走で、われわれは「エネ」と称していた。これは外国籍の神父が米海軍のPXで入手してきたものだった。そのような歴史を共有して、残された少数者の仲間意識は殊更強くならざるをえない。

二期には囲碁愛好者の会があって、烏鷲の勝敗よりも二次会の酒席を楽しみに10名弱の仲間が月に一度集まっている。春と秋の合宿には、碁を打たない何人かも参加する。このグループが、ことをなすに当たっての核となっている。

十全の準備をして、会計のつじつまを合わせていくことは、負担である。準備段階では最後の同期会と確認していた。しかし、会を終えて、多くの仲間が顔を合わせるソフトな機会を、今後もたびたび作れないものかと、腹案を寄せ合っているところである。



平成27年度5期同期会(4月18日)

川西武夫 (5期)

今年も服部君の世話でここ数年定例会場となっている「浜銀シティクラブ」で開催、43名のRespectable friends が参集した。5期の殆んどが喜寿の年回りであるが、皆若々しく、厳しい目で見てアラ古希以上の面貌は皆無、嬉しいかぎりだ。節目に因んで会の現況を略記しておく。

5期会は昭和32年3月卒業の112名に、卒業までに他校への転校などあった仲間の有志6名が加わり、118名が母体となった。卒業後58年を経て逝去者35名、住所不明者等7名を欠く変遷があり、現在は76名がメンバーである。このうち69名が首都圏、他の7名は札幌、仙台、大阪、神戸等に在住。同期会への出席者数は毎回40名+α、この歳での出席率6割は中々の盛会で、幹事団に謝意を表したい。また同期会誌「THE 5期」を年一度発行、全員に配布している。編集委員会の諸兄の労を多としたい。

懇親会は定刻の午後2時、和泉沢君の司会でスタート。次いで天野会長より、お声をかけた阿部先生、熊野先生はともに体調芳しからず欠席、3月急逝の西村君の訃報、幹事団の一部交替者の紹介、同期会誌の原稿募集への協力要請、今日はアトラクションなしでやるが大いに楽しんでもらいたい、等々の報告と挨拶があった。続いて大阪より馳せ参じてくれた三崎君の音頭で乾杯。と同時に会場は一気に歓談と談笑の場へと転じた。それぞれが酒杯や料理皿片手に所狭しと場内を巡り歩き、あるいは椅子を寄せ合い車座を成しての交流の渦は、いつもながらの光景で、アトラクションがなくても退屈する者など一人としていない。宴たけなわの間を見計らって、編集委員から原稿募集のテ

ーマ、「終戦の時どこでどうしていたか」の趣旨説明があったが、これをきっかけに青木君、竹村君、里見君が次々に演壇に上ってスピーチを展開、「沈黙！」の制止なきまま会は盛り上がり続けた。話の内容は議事録なきため、ここでは要約できず誠に残念だが許し給え。

気付かぬまゝ予定の2時間が迫り、田中君指揮のもと「Eiko High Forever」等大合唱、締めは早川君の気合の込めたるエール、「フレーフレー栄光」「フレーフレー5期」に全員唱和、拍手鳴り止まぬ中、栗原君の閉会の挨拶で会は無事お開きとなった。最後に集合写真を撮り、再会を約して散会。今年は高井君が一人でカメラマンを担当、ありがとう、お疲れさまでした。

喜寿を迎える年にあたり、序に記しておきたいことがある。私たち5期生は在学中、かぶき者というか、キャラ立ちすぎの者揃いで、フォス校長はじめ諸先生をハラハラさせっぱなしであった。それだけに見放せない可愛い連中だと、格別の慈愛を注がれ育てられたと自負している。また、「Eiko High Forever」「Pirates' Song」、あるいは「千里の波濤」の歌詞に秘められた学園創始者たちの苦難や苦労、ファイト、そして建学の精神(Eiko Spirit)を感性で受け止め、体が共感した。さらに人材ではなく人材たれとの薫陶のおかげで、世のため人のために働いて今日を迎えることができた。たゞたゞ感謝あるのみだ。あわせてこのレポートを、今は亡き35名の友垣へのさゝやかな「Requiem」として捧げさせてもらいたい。



栄光5期同期会

8期同期会報告

田辺 宏 (8期)

暑がりには不評だが、8期会は、8月8日と決めてPRしてきた効果もあって、55名が集まった。既に28名が帰天しており、連絡不能の者もいるので、同期の約半数の仲間が一堂に会した事になる。

会場は、昨年まで8年間毎年開催した横浜・関内のビルが建て替えとなった為、横浜駅西口5分の横浜銀行施設「横浜シティークラブ」に変更。

同行OBの山野井君に幹事になってもらい、世話になった。また、初めての会場なので、入口での案内役を深谷君がかって出してくれた。

受付は、毎回高井・矢口両君がやってくれ、ありがたい。司会も高井君とこのところ固定化し、おかげでスムーズに進行できる。

会を始めるに当たり、今年5月に亡くなった井街君を含め28名の仲間と亡き恩師のご冥福を祈って黙祷。続いて中川君の乾杯となったが、能弁なので、早く飲ませろの声も。

飲み出せば、後は筋書きの無い和やかな会となり、出席者が主人公。話の輪が広がった。

恩師については、ピタウ師が日本に戻られた8年前、5人の恩

師にご臨席賜ったが、ご高齢を配慮し、以後仲間のみの「飲み会」となっている。

ここで特筆すべきは、同窓会副会長時代に脳梗塞で倒れ右半身不随となった吉田裕美君が、車椅子で単身介護タクシーを利用して参加し、不自由な身体ながら最後の締めまで居てくれた事である。去年は北畑君が車で面倒見たが、酒が呑めないのは気の毒と、大金を払って来てくれたのだ。

この吉田君と久しぶりの岡島君・南君の近況等を話してもらったが、少々遠距離の岡島君は遅れないようにと早めに出た為、喫茶店を3軒もハシゴした由。南君はウイスキー効果もあってか、東大時代に学んだ「空手の型」を披露し健在ぶりをアピール。高井君が頃は良しと石川君を指名し、彼の指揮で恒例の合唱へ。「千里の波濤」「Eiko High Forever」「Pirates' Song」を蛮声張り上げて唄い、一年一度の思い出を重ねた。中には歌が嬉しくない人もいると思うが、一時青春時代が蘇えることは間違いない。

最後に集合写真だが、大勢なのでいつも床に座ることとなるが、誰も厭わないで座ってくれる。

コンパクトカメラなので、出席の証明にしかならないのだが、文句を言う仲間は誰もいない。

二次会を考慮して早めに終わったので、皆それぞれ気の合った仲間と共にしたと思うが、幹事が用意した「カラオケ」には10人が参加し、飲み会の延長となった。余りエバレタ話ではないが、この夜、図らずも小田原に泊まって翌日帰宅し、奥さんにほめら



れたと電話くれた仲間もいた。昔通勤時代には、乗り過ごした経験は誰しもあるが、未だに若いなあと変なことに感心。後日、感謝のメールを多数頂戴したが、トラブルの話は来ないので、皆さん無事帰宅されたことでしょう。

来年も8月8日(月)、同じ会場で開催しますので、また元気で会いましょう。



14期同窓会(ミニ同窓会)

新井 隆 (14期)

14期生の同窓会が(事前案内期間が少なかったのでミニ同窓会と呼称)、2011年以来、4年ぶりに5月23日に開催された。前回は、恩師大木神父のネパールでのご活躍等を口述した自伝の出版記念を兼ねての開催であった。今回は、九州佐賀県のシトー修道院におられる大木神父を横浜にお招きし、ネパー

ル・ポカラの教会献堂式報告を関係の方々にお聞きいただく催しを末吉町教会で実施したあと、17時より、横浜駅西口のホテル・プラムにて14期生27名(付添いで飯沼さん17期も飛入りで)の参加を得て開催された。



大木神父(2015.5.23)

大木神父が横浜に来る、という情報を得たのが4月25日。あと、ひと月も余裕がないという日程で、どれだけの声を掛けられるかの不安の中、とにかく会場を押さえ、メールとハガキで連絡をすることになった。相撲で言えば、まさに待ったなし。栄光同窓会事務局の方々のサポートを得て、住所と、メールアドレスの判明分だけで、なんとか156名に連絡できた。我々の年齢では、丁度定年退職の時期であり、8名ほどは届きそうもない会社のメールアドレスしか連絡方法がなく、しかもひと月前では、多くの人既に予定がまわっているという状態でいったい何人の参加があるのかと心配だったが、それでも、できれば行きたいというコメントを付けて来た返事が多く、事前に根回しできれば、かなり多くの人の参加が期待できそうとの確信を得た。70歳の古希を祝



14期ミニ同窓会(2015.5.23)

う同窓会も、余裕を持って計画してと、前向きの希望を持った次第です。各位のご協力と賛同をお願いします。

定刻にスタートしたホテル・プラムでの4年ぶりの同窓会は、県外からや、海外から帰国中の人もいて、互いに名札を見て、昔を懐かしんだり、4年～数十年のブランクに驚いたり、若かりし頃に思いをはせたりと、しばらくは大木神父のご挨拶を聞く時間も取れないほど。進行役の林好君の判断で、乾杯の音頭だけを先行したのは、正解のようでした。

要用の為、先に退席する飯田正人君の話聞き、大木神父の挨拶では、あと半年で90歳です、という話を頂き、昔の姿を彷彿とさせるお姿に感心しきりでした。14期生のうちでは、大木神父の薫陶や、ご指導に多少なりとも影響された生徒は少なくなく、卒業後も時々高校時代の熱い思いを思い出し、志を新たにしたり、立て直した人もいと聞きます。ネパール・ポカラのスライドを、17期の飯沼修君の説明で見た後は、いろいろな方、県外や国外からは、田中克比古君、野間口美雄君、山本裕君が、さらに佐野千遥君、石川和弘君、徳田政道君らの近況やら抱負等を楽しみながら聞いて、たくさんの料理とアルコールを口に運びました。気が付いたときには会場の制限時間になってしまい、最後はホテル会場係の方の手を借りての集合写真で締めにして、名残り惜しみながら会場を後にしました。

繰り返しになりますが、次回は70歳(古希)を記念してまた、集まりたいと思います。十分に余裕をとって連絡しますので、皆様の参加をお願いできればと考えています。

27期ソフトボール同窓会

藤岡 学 (27期)

2015年5月24日、今年もまた決戦の時が来た。栄光学園卒業の日から幾星霜、いまだ決着を見ぬ27期生ソフトボール王者の座を巡る戦いの日である。

三角ベースの最後世代の27期生、栄光学園在学中は、各自それぞれの部活動に励みつつも、在学中そして卒業後も何かと言えば、同期で集まり、ソフトボールや草野球にいそしんでいた。この集まりはいつしか年次定例化し、最近は一学期中間試験時の日曜に、栄光学園のグラウンドでのソフトボールの試合と、その後の懇親会というプログラムになっている。幹事は部活動単位の持ち回りで、今年は野球部が当番だ。当番幹事は年明けから集まって運営協議を重ねて準備をしてきた(ただし、各回の協議時間は15分で、あとは...)

毎年、ソフトボール大会の開催をご支援頂き、またプレーヤーとしても参加して頂いている迫先生と飯野先生に、今年もご協力頂いて初夏の一日、元・青春の汗を流したのである。

ソフトボールは、毎年、陸上フィールドを借りて実施しているが、今年は、中間試験の日曜日に現校舎の見学会と講堂での卒業生向けシンポジウムが開催されたため、野球グラウンドを利用させて頂いた。野球部員にとっては「聖地(?)」のグラウンドも昭和の当時とはホームベースの位置が違い、栄光アパートのなくなった風景には違和感もあるのだけれど...

ゲームは毎年3試合。まず第1試合は、昭和48年入学時のA、B組対C、D組。第2試合は、高三時のA、B組(文系)対C、D組(理系)。毎年、所用などで参加者が入れ替わる割には、なぜか人数は、ほぼ等分してしまう。

陸上フィールドで開催していたときは、外野を4人で守っていたが、土のグラウンドで打球の走りが速い野球グラウンドでは5人で守ることにした(中年の男どものやることにつき、読者諸氏のご寛恕を願いたい)。それでも球足の速い打球が外野に飛ばば、あっさり本塁打。スコアはどんどんラグビー並みになってくる。



野球グラウンドに集う元・青春男児(2015年)

年齢知らずのプレーヤー達の中で、迫先生は古希を過ぎた今でも一番のスラッガー。毎年のように弾丸ライナーが外野のはるか頭上を超えていく。今年は体調を考慮してプレーには参加されなかったが、現役当時と変わらない姿には、われわれも大いに励まされる。

さて、試合も進み、今年の最終試合、メインゲームは、野球部対野球部以外。バスケットボール部、硬庭部、サッカー部などの面々が野球部には負けない、と最も張り切るゲームである。例年は、なんだかんだと野球部が勝利していたが、昨年はエアポケットに陥ったような敗戦。各方面から「無気力」との強烈な批判を浴び、今年は、野球部主将以下、捲土重来の一戦だ。

ゲームは、野球部側が当時野球部長だった飯野先生を先発に立てて奮戦。飯野先生には、毎年、投打「二刀流」で活躍頂いている。手に汗握る両軍の真剣勝負は僅差のまま最終回裏。1点差に追いつけた野球部はさらに相手を責め立て、二死満塁の一打逆転サヨナラのチャンス。打席に強打者飯野先生。

相手投手の覚悟を決めた一球、飯野先生のパッドが一閃、鋭い打球がはじき返され...

戦いは終わり、シャワーを拝借して、全員で懇親会場へ。年



迫先生、飯野先生を交えて参加者一同で(2015年)

寄りの冷や水のソフトボールは、年寄りの冷や酒の会に变身。直前のゲームの思い出を肴に、互いの近況を語り、そして来年の再会を約して、今年も長い一日は終わっていくのであった。

2ホール、もう1ホールは島崎が3ヤードにつけ、確実かと思いきや崎山氏に抜かれてしまった。

次回(第13回)も

会 場 : 季美の森ゴルフ倶楽部

日 時 : 11月29日(日)

7:30~7:52スタート

以上、4組確保した。

支部等活動

第12回栄光学園バドミントン部OBコンペ(2015年5月31日)報告、及び第13回コンペのご案内

島崎裕之 (26期)

天気予報が運よくハズレ、快晴に恵まれた5月31日(日)、恒例のゴルフコンペが『季美の森ゴルフ倶楽部』で開催された。

参加者(期順・敬称略)は、宮内貴正(6)、江田滋人(17)、服部秀昭(18)、崎山一茂(23)、野口達司(24)、砂川佳昭(25)、島崎裕之(26)、足立光明(32)、松尾 力 (32)、以上9名(3組)。11回連続皆勤を誇っていた下田精治氏(25期)が残念ながら負傷のため欠場。これですべて12回皆勤は万年幹事の島崎のみとなった。2年半ぶりに崎山氏が参加。服部会長、砂川氏との三つ巴バトルが実現した。

優勝は3回連続の服部会長。『このコンペは私のためにある』とまで言わせてしまった。以下準優勝砂川氏、3位崎山氏となった。

江田氏は前回ブービーをとり、17期同期の皆様より相当冷やかしの言葉をいただいたとの事であったが、何と2回連続となってしまう。この件については私から弁護しておく。『17期の皆様。江田先輩のハンディは服部会長よりも小さく、グロスでは4位だったので。今回の連続BBはハンディに恵まれたことに尽きます!』

その他ドラコンは砂川氏が2ホール独占。NPは服部会長が

先日の同窓会アンケートでは「バドミントン部がゴルフばかりやっていて……」という声が多く聞かれたが、是非、初心者・若手も挑戦されたい。最若手が『50歳』なので!



後列左より、野口達司(24)、足立光明(32)、崎山一茂(23)、島崎裕之(26)、松尾 力 (32)、前列左より、服部秀昭会長(18)、宮内貴正(6)、江田滋人(17) (敬称略) (砂川佳昭氏(25)は電車の都合でパーティーは早退)

祝・飯野雅彦神父(4期生) 司祭叙階50年

栄光同窓カトリックの会 梅津尚志 (4期)

4期生の飯野雅彦神父がこの春に司祭叙階50年の「金祝」を迎えられた。栄光学園卒業の司祭としては初めての金祝であり、半世紀に亘る司祭活動に心からの祝意と敬意を表したい。



飯野雅彦神父近影

その祝いの会が3月14日に磯子教会で開催された。司教ミサに続いて祝賀パーティーが催され、他教会からも多くの司祭・信徒が参集した。それは、飯野神父の50年に亘る多面的な司

祭活動の表われに他ならなかったが、また、師をとり囲む和やかな雰囲気は、師が大らかな優しい気持で幼児からお年寄りまでの信徒に接してきたことを物語る微笑ましい風景であった。

その司祭への道を、飯野神父は既に高校時代から歩み始めていたと思われる。

飯野君が洗礼を受けたのは高校卒業直前の1955年12月8日であった。同学年の私はその数年前に受洗していたので、少しだけの先輩信徒として代父を頼まれた。受洗者は一人、スタッフ・フォス校長司式の静かな洗礼式であった。中学生の頃に集団で洗礼を受ける同級生が多い中で、飯野君はじっくりと信仰について学び、頭でも心でも熟成の時を待ち、最終的に高校3年の12月に決断したのであった。その4ヶ月後には上智大学の史学科に進学したが、1年後には司祭への道に進むために哲学の専攻に転じた。

高校2年生の頃のことで思い出すのは、飯野君が一冊の古びた小さな本を貸してくれたことである。親鸞の伝記であった。内容はあまり覚えていないが、その時に触れた一首の和歌だけはずっと忘れずにいた。

『明日ありと思ふ心のあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものか』

頭を剃って僧籍に入る得度を前にして、周りの大人たちはまだ九歳の松若丸(親鸞の幼名)を想い遣って、夜も更けたから得度は明日に延ばすよう勧めたときに、松若丸が詠んだ歌と言われている。明日までには内面的・外面的に何が起るか分らない。良き決心は時を置かずに行うという、幼いながらも決然とした意志の表明であった。カトリックになっていた私であったが、親鸞の歌に深い感銘を受け、若い心に定着した。

この本は飯野君のお父上のものだったと聞いた。本は既に大

分傷んでいた。お父上が繰り返し読まれ、息子にも読ませたのであろう。このお父上の篤信の心は自然と息子に伝わったに違いない。息子が選んだのは親鸞ではなくイエスであったが、両者には一脈相通ずるところがあると思う。やがてお父上もイエスを信ずる道に入られた。

飯野君とは学校の丹沢キャンプにも一緒に参加した。その時の一枚の写真がある。夏の丹沢は暑い。キャンプ場への厳しい道を汗を拭きながら登っているが、よく見ると自分の重いリュックの上にさらにボストンバッグを載せて担いでいる。これは年配の先生のボストンバッグである。登り道で苦しそうな年配者の様子を見て、荷物担ぎを買って出たのであろう。飯野君は洗礼を受ける前から既にイエスに従う心根があったように思う。



丹沢キャンプでボストンバッグを重ねて担ぐ学生時代の飯野神父

司祭叙階を受けた飯野神父は横須賀三笠教会を振り出しに、鶴見、磯子、菊名、松本、金沢、山手等、多くの教会を歴任し、その傍ら幼稚園園長として園児たちと親しく交わりながらその教育に携わった。さらにその間、横浜教区学生連盟(学連)総指導司祭、横浜司教区事務長、横浜小神学院院長、教区一粒会総指導司祭、横浜ボーイスカウト担当司祭等々の役職を担当し、現在は磯子教会で信徒の世話をしながら、山手の「横浜みこころ幼稚園」の園長も務めている。かなり前から心臓の疾患を抱えながらも、喜寿を過ぎてなお現役で神への奉仕に努める姿に、友人として「無理はするなよ。み旨のままに！」とエールを送っていた。

ところで、栄光学園はこれまでに何名の司祭を輩出してきたのであろうか。

下の表「栄光学園卒業生カトリック聖職者一覧表」に見られるように、18名である。2期生の関谷真神父(イエズス会)と3期生の山本正二神父(カルメル会)は帰天されたので、現在は最年長の飯野神父以下16名。2期生から3期生・4期生・5期生・6期生・8期生・9期生・11期生と続くが、その後は数年に一人という状態になり、時代が下るほどにその傾向が強くなる。その背景には日本の社会変化、それに伴う価値観の変動、教員としての司祭の減少、生徒の中の信徒数の減少等々があろうが、本稿はその問題を論じる場ではないので、ただ、今後も卒業生から司祭への「召し出し」の多からんことを祈りつつ筆を擱く。

2015.08.20

期	氏名	所属・位階	赴任先教会等
2	関谷 真	イエズス会・司祭	(2002年逝去)
3	山本 正二	カルメル会・司祭	(1988年逝去)
4	飯野 雅彦	横浜教区・司祭	カトリック磯子教会
5	森 一弘	東京教区・司教	東京真生会館 理事長
6	上原 功宏	横浜教区・司祭	カトリック熱海(沼津・三島)教会
6	久我 純彦	イエズス会・司祭	カトリック秦野教会
6	塩谷 恵策	イエズス会・司祭	広島 長束修道院 西日本霊性センター
8	熊木 建郎	横浜教区・司祭	愛知県豊田市
8	作道 宗三	イエズス会・司祭	東京 イエズス会管区長 補佐 岐部修道院
9	田代 和生	横浜教区・司祭	カトリック甲府(塩山・山城)教会
11	植栗 彌	イエズス会・司祭	東京 駒場修道院(ザビエルハウス)
17	鶴飼 好一	横浜教区・司祭	カトリック松本教会
20	梅村 昌弘	横浜教区・司教・教区長	横浜教区司教館
26	林 健久	横浜教区・司祭	カトリック静岡(千代田・八幡・谷津)教会
27	伊藤 淳	東京教区・司祭	東京 カトリック清瀬教会
34	原田 雅樹	ドミニコ会・司祭	東京 清泉女子大学 準教授
45	濱田 壮久	横浜教区・司祭	カトリック松本教会
47	宮内 毅	横浜教区・司祭	在米

が、課題は若手の参加要請。実は当初のメンバー最若手が26～28期であり、それは今でも変わっていない。40代から50代半ばとなっている。

ところが今回、高田賢氏(37期)が多忙なスケジュールの中、長野から新幹線で駆けつけてくれた。それで初めてわかったことだが、高田氏のお父様は地元で内科医院を営んでおられ、山口会長とは杯を酌み交わす仲であるとの事。ローカルな話題で盛り上がった。

高田氏に聞くと、アラムナイで当同窓会(支部)の活動記事を常々読んでいて、自身も参加したいと思っていたそうだ。前号掲載新年会報告の『若手の参加を求む』の一言が功を奏したか。会報への掲載を継続する事の重要さ、『アラムナイ』の存在の偉大さを全員が認識した次第である。今後も一歩ずつ参加者を拡げていきたい。



左より、金子和(27期・事務局長)、中村司(7期)、酒井伸雄(2期)、山本明德(7期)、高田賢(37期)、伊藤紀一郎(22期)、山口洋一郎(13期・会長)、島崎裕之(26期)

(注)本稿は磯子教会編纂の「飯野神父様 司祭叙階50周年記念」誌に寄稿した拙文に加筆し、磯子教会の了解を得て『アラムナイ』に転載するものです。なお、「聖職者一覧表」は「栄光同窓カトリックの会」の前川卓代表の原案に拠った。2015年8月現在の赴任先も示してあるので、ご利用に供したい。

茅ヶ崎栄光同窓会第8回総会報告

島崎裕之 (26期)

6月21日(日)18:00より、茅ヶ崎駅南口近くのイタリアンレストラン『パリエッタ』において、標記総会が開催された。山口洋一郎会長(13期)の挨拶に始まり、2014年度活動報告・決算報告・2015年度活動方針・予算案と滞りなく了承・可決され、酒井伸雄氏(2期)の乾杯の発声で懇親会に移った。

山口会長から『地域に触れながら会員相互の親睦を図りつつ仲間を増やそう』との今年度目標が提案された。茅ヶ崎栄光会は発足以来7年間、小人数ながらも継続的・活発に活動している

なおこの場を借りて島崎より、脳腫瘍と闘う現役栄光生音楽家 加藤旭君の作品集『光のこうしん』の話をさせていただいた。詳細は同窓会本部の記事を参照されたい。これにより早速購入のご依頼もいただいた。『何かの役に立ちたい』という彼の思いに応えることが、厳しい闘病生活を送る加藤君とご家族様に対する応援であろう。そして是非、病を克服することを願いたい。

栄光野球部OB会、11月3日発足！

発起人 花井勝三 (12期)

アラムナイ春号に野球部OB会設立の動きを報告しましたが、その後準備を重ね、「栄光野球部OB会」はいよいよ11月3日に発足することとなりました。これも偏に、エールを送り続けてくださった先輩方、ご協力くださった学園の先生方、一緒に準備してくれた同輩や後輩たちのお蔭と深くお礼申し上げます。

もう一つの原動力は現役野球部の活躍でした。OB会設立の時計が回っている時、現役野球部は春は県大会準優勝・関東大

会出場、夏は県大会Aブロック準優勝(これに勝てば南関東大会出場だった)と輝かしい戦果を残してくれました。OBたちは一喜一憂し、私もスタンドに足を運んで選手の気持ちになって応援しました。OB会があったらもっと大きな応援ができたかもしれないと今度こそOB会を立ち上げなければいけない気持ちになりました。



現役野球部選手の雄姿

野球部OB会の特徴はCOMMUNICATIONです。1期から63期まで各期に委員を立ててもらいました。「試合の応援にいこう!」「コンパをやろう!」といった連絡は期委員を通じて行きます。期委員を介すことでどんな呼びかけも親近感をもって受け止めてもらえるのではないかと期待があります。

OB会が楽しくなるかどうかはこれからの育て方次第です。皆で楽しい場所にしていきましょう。まずは同じ釜の飯を食ったものが設立パーティに集まって身近になりたいと思います。もともとは栄光グラウンドに集まって野球の試合をやろうと計画していましたが、母校が校舎建て替え工事中であることから実現できず、ホテルでの設立総会・パーティの開催となりました。野球の試合は来年以降に取って置いてまずはコンパで盛り上がりましょう。

それでは野球部OBの皆さん、11月3日、ホテル・プラムで会いましょう!(50ページの「お知らせ」欄をご覧ください)

晴れの国から(岡山栄光会)

黒川好宏 (14期)

岡山は瀬戸内海に面し、年間を通じ降雨量が少なく夏涼しく冬暖かい気候温暖な場所です。台風は四国に守られ、大震災、大津波被害の記録もなく日本で最も安全な場所です。且つ、魚介類に恵まれ、朝日米という美味しいお米が生産され、マスカットや桃の名産地でもあります。更に医療機関の数も多く、中でも倉敷中央病院は医療技術、設備、スタッフ等総合力で東大病院を凌ぐ日本一の実力を有するとの事です。

首都圏に比べると物価、特に住居費が安く非常に住みやす

い地域だと思います。

扱、岡山栄光会は平成24年6月6日6名の参加により第一回の会合が開催されました。

その後31期高口さん(日銀)、14期の新倉さん(元岡山理科大学)が帰郷されましたが、前回(本年1月19日)からは13期の水田先輩(倉敷市真備に移住、広島大学名誉教授)が新規に参加されています。初回の同窓会から早3年、7月14日、水田さん、18期伊藤さん(倉敷中央病院)、20期岡本さん(丸五ゴム)、31期太田さん(ロングブラックパードナーズ)と14期黒川(元三菱商事)の総勢5名で7回目の栄光会を開催する事が出来ました。

会場は岡本さんのお手配で観光スポットして有名な倉敷美観地区の瀬戸内料理のお店です。岡山の南西部にある著名な寄島漁港から直送された新鮮な魚料理です。まさに絶品でした。旨い魚には日本酒、店推奨の「寄島」という銘柄の地酒を冷で頂きました。やや甘口乍ら口当たりのスッキリした飲みやすいお酒でつい盃を重ねることとなりました。普段は焼酎党の伊藤さんもかなりピッチが上がっていました。一升瓶1本と2合が空いていました。

最近、倉敷市真備に転居して来られた水田先輩は、広島大学でヨーロッパ中世哲学を研究されていたらしいようです。トマス・アクィナスの「神学大全」(全45巻)がやっと全部日本語で読めるようになったとのお話が印象的でした。研究の傍ら農作業されるとの事で真っ黒に日焼けされともお元気そうでした。ご本人によると血糖値が高めとの事です。

伊藤さんは倉敷中央病院に三十数年勤務され今では経営側の業務が主だそうですが、時々手術もするそうです。炭水化物を摂取しなければ血糖値は絶対上がらないと強調されていました。

健康問題は皆の関心事です。

岡本さんは「マッサン」のニッカウキスキーに入社され結婚後「丸五ゴム」(自動車部品製造)に転籍、副社長とし活躍されてお



この写真は水田先輩が初参加された本年1月の新年会の際のもの

ります。

太田さんは興銀出身で現在はコンサルティングをされ、東京在住ですが仕事の関係で頻繁に来岡されています。岡山栄光会にもほぼ毎回出席頂いております。

黒川は仕事から離れ、倉敷にて豊富な時間を贅沢に過ごしております。

栄光当時の昔話、近況報告で盛り上がりアツと言う間の3時間でした。

今回で7回目の岡山栄光会ですが回を重ねる毎に親近感が増し皆さん毎回楽しみにしている様です。小規模乍ら本当に素晴らしい会に成長したと思っています。

これも何といても率先して幹事役を引き受けて頂いている岡本さんのおかげです。

ご苦勞様ですが引き続き宜しくお願いします。

次回、来年の新年会での再会を約して散会となりました。

(追伸)岡山栄光会では、近郊のOBの方のご参加を心から歓迎いたします。備後・福山の方、播磨・姫路の方一度参加してみませんか。

岡本(t-okamoto@marugo-rubber.co.jp)まで連絡をお願いします。

歴史文学散歩

栄光学園同窓会歴史文学散歩

2015年5月28日開催

「アカテガニ(赤手蟹)の産卵地小網代の森と新井城址を訪ねる」

神田醇一 (13期)

京急三崎口駅を下りると、私たちはまず丘陵地を歩いた。周りは豊かな畑が広がる。三浦といえばスイカと思っていたが、マスクメロンまでつくられていた。穏やかな日差しのもと、なにか懐かしい暖かさが心の奥底から湧いてきた。

丘陵地から少し下ると小網代の森に入る。小道には樹木が覆いかぶさり足元には小川の流れと湿地がつづく。ゆたかな丘陵地の末端にとり残されような小さな森と湿地。しっかりした歩道がつくられ、人はその上しか歩けない。また、この森では食事ができるのは指定された1箇所だけだ。今の世の中では、自然を守るとはこういうことかもしれないが、動物園で檻の中の動物たちを見ているようで少し味気ない。自然とは手で触れ、その中に浸ってみなければ分からないものだと思う。とはいっても小網代の森は開発をまぬがれた貴重な自然の一つだ。小さな中に森、川、海と多様な自然が互いに影響しあいながら共存している。

小網代の森は、アカテガニの放仔(ほうし)が観察できる場所として知られている。アカテガニは森に棲むカニだが、7-8月の大潮の夜、満潮の時間にメスが海岸に集合して、幼生(ゾエア)を海に放つ

この森はいわゆる「谷戸(丘陵地を川が浸食して谷状になった地形)」で、川は水源から約1km先の海にそそいでいる。そして昭和の後半までは現役の水田として稲作が行われていたとのことだ。帰りのバス停そばの土産物屋のおばあさんにその話を聞いて、私は、はじめて、おつに澄まし込んだような小網代の森を身近に感じた。



参加者集合写真



アカテガニの棲家



居た！これがアカテガニ

約3000年前日本に稲作が伝わったが、鉄器具のない中で平地に水田をつくる技術は大変難しいものだった。そこで目を付けられたのは谷戸だった。谷戸は谷の両側を森に囲まれている。森の土壌はスポンジのようなもので降った雨の約35%を吸収してため込む。そのため大雨が降っても川は溢れず、少雨の時も森の土壌が溜めた水を少しずつ地上に排出するので水が絶えることがない。すなわち谷戸はいつも水に恵まれている。この水を利用して稲作が始まったといわれている。

海に今にも飲み込まれそうな小さな小網代の森まで使って、私たちの祖先はイネをつくっていたと思うと、日本人のイネへの思いの強さを改めて感じる。

新井城跡に至る山道は照葉樹が生い茂り緑陰が濃い。三浦道寸の墓は山が海に落ちる間際にあった。木々の間から見おろすと、岩場に白波が打ち寄せていた。ここで道寸は自害して果てた。辞世の句が深く深い。

「討つ者も 討たる者も土器(かわらけ)よ
くだけで後はもとの土くれ」

お知らせ

ドナル・ドイル神父叙階50周年お祝いの会

花井勝三（12期）

1960年代に栄光で教鞭を取られたドナル・ドイル先生は今年叙階50周年を迎えられます。

ドイル神父と関係の深い上智大学のOB有志がお祝いの会を計画し、栄光学園OBと広島学院OBにも参加を働きかけてられました。ドイル神父とご縁のある方は是非ご出席ください。

日時: 10月17日(土) 18:30~20:30(受付は18時から)

場所: 横浜駅西口ホテル・プラム

2Fパレ・ロワイヤル

(www.hotel-plumn.jp/)

(電話: 045-314-3111)

会費: 7,500円(予定)

12期はドイル先生の薫陶を受けましたので、有志がパーティに参加します。ご参加の方は主催者に取り次ぎますので、末尾記載のメールアドレスにご連絡ください。(同窓会事務所でも承ります。電話: 0467-44-8875)

ドイル神父には慶事が重なり、先月アイルランド大統領殊勲賞を受賞しました。アイルランドに最も貢献した人たちに贈られる名誉ある賞です。以下の記事をご覧ください。

<https://www.dfa.ie/news-and-media/press-releases/press-release-archive/2015/august/presidential-distinguished-service-awards-2015/>

連絡先:

花井勝三(12期)

メールアドレス: hanai.shozo@gmail.com



(栄光時代のドイル先生・中央) [サッカー部50年史より]

栄光野球部OB会設立祝賀パーティのご案内

栄光野球部OB会設立準備委員一同
代表 花井勝三 (12期)

待望久しい「栄光野球部OB会」が11月3日、いよいよ発足します。野球で部活動を楽しんだ全ての仲間が集まってその門出を祝いたいと思います。野球部OBは是非ご参加ください。楽しい企画を用意してお待ちします。

野球部OBでなくても関係ある方々のご参加も歓迎いたします。

日時: 11月3日(火曜祝日)

受付 16:30より

開宴 17:00 終宴 19:00

場所: 横浜駅西口 ホテル・プラム

3F ジョルジュ・サンク

〒220-0004横浜市西区北幸2-9-1

TEL 045-314-3111

<http://www.hotel-plumm.jp/about/access.html>

会費: 社会人8,000円、学生3,000円

申込み: 原則、期委員を通じてお申込みください。

(問合せ先)

花井勝三(12期) hanai.shozo@gmail.com

坂本永造(17期) takeiteizo@yahoo.co.jp

26期会総会開催日 平成28年1月2日に決定！！

島崎 裕之 (26期)

26期同窓生各位

毎年新年1月2日に中華街に集まっていたのを覚えていらっしゃるだろうか。最後の開催はいつだったろう？私の記憶が確かなら、もう30年くらい前だったと思う。

われら50代半ば、アラ還という部類に片足を突っ込んでいる。定年までカウントダウンが始まり、子供たちの独立・親の介護・自身の健康問題・・・皆それぞれ悩み苦しみ、また節目を迎える年代だろう。

30年ぶりに再会しよう。思い出話に花を咲かせるのもよし、愚痴を言い合う聞き合うもよし。でもまだまだ立派な『現役』！そして2016年は『OBゼミ』の担当年次でもある。ここらで一発26期のパワーを再構築しようではないか！

日時: 平成28年1月2日(土)夜(詳細時間未定)

会場: 横浜ベイホテル東急宴会場

会費: 8,000円程度

詳細は追ってお知らせいたします。

なお、いままで全同窓生の約半数の皆様にはメール等配信いたしておりましたが、残りの方々は連絡先等が不明です。

島崎からのメール等が届いていない方は、

E-mail: HiroAya.4039@bj8.so-net.ne.jp

TEL: 090-1660-5583

までご一報ください。

28期同期会のお知らせ

高橋英治 (28期)

毎年恒例の28期同期会は下記の通り行います。すでに連絡の取れる方にはメールでご連絡済みですが、最近メールグループが使えなくなってから、アドレス不明の方がおられるようです。

このALUMNIで初めて知った方は、メール連絡先不明になっている可能性が高いです。至急幹事に連絡してください。

最近、同窓会に出席するメンバーが固定化してきています。毎年開催でこの機会にみんなに会おうという気持ちが盛り上がり、卒業以来初めてだったりする参加者が来ていますので、楽しみにしててください。

日時: 11月7日(土)

開始: 17:30開宴(17:00受付開始)

場所: 1次会 ホテル・プラム 3階 George V West
2次会 横浜西口三栄ビル8階 三間堂

2次会からの参加も大歓迎です。

金子好光先生ご出席予定です。他のゲストは調整中。

本年度幹事は、周佐喜和、落合秀紀、山口浩和、悦田和久、大木俊治の5名が担当しています。

卒業生インタビュー記事企画

広報部

同窓会広報部では、朝日新聞神奈川版連載記事「青春スクロール」で紹介された卒業生以外の方に取材を行い、どんな分野でどんな活躍をされているOBが居るのかをご紹介します。インタビュー記事を企画しております。朝日新聞の記事も紙面が限られており、取材を受けた方のお話が十分にうかがえたとも言えま

せんので、一部朝日新聞記事に掲載された方も交えて、広報部若手担当者がOBの方を訪問してインタビューさせていただくこととなります。インタビュー記事は同窓会ホームページならびに会報ALUMNIでご紹介していきます。どうぞお楽しみに。

山本洋三先生(16期)の“懐かし写真館” 同窓会HPで好評連載中！

広報部

『たぶん7～800枚のスライドが入っているボール紙の箱が昔からあって、その大部分が父が撮ったカラー写真であることは分かっていたのだが(ぼくが高校時代から大学にかけて撮った写真も混ざっている)、現役の教師をやっていたときは、ヒマな夏休みなどがあつたとはいうものの、やはり今にして思えば、それなりに忙しくて心の余裕もなかったのだろう、それらのスライドに何が写っているのかを、一枚一枚確かめることもなく、何度も箱を変えたり、その置き場所を変えたりして今に至つたのだつた。

フェイスブックを始めてから、昔描いた水彩画やら、新しく撮った写真やらを「投稿」(自分のフェイスブックに掲載すること)していたが、手元にあつたぼくの幼い頃の古いモノクロ写真を「懐かし写真館」などと称して投稿したら、案外「うけた」ので、そうだ、あの写真はどこへ行ったんだろう、と探し始めた。……』先生のエッセイ“よみがえる時間”(2015.2.23)

と山本先生がフェイスブックでスタートされた「懐かし写真館」の写真と、これまた先生がブログやフェイスブックに掲載されたエッセイを同窓会広報部の方で組み合わせて、同窓会HP版の“懐かし写真館”の連載が始まりました。

写真は1960年以前のものもあり、連載1回に20枚以上掲載。見ていると、栄光生時代の写真は言うにおよばず、先生の小学校でも自分の近所の小学校、先生の住んだ町でも自分の近所の町のように思えてきて、まさに「あの時代」がここに切り取られ、残っています。栄光の先生方の写真も本当に懐かしいですし、エッセイも先生らしさ満開。ぜひご覧ください！

その1 (よみがえる時間、栄光入学式、ほか)

その2 (海のキャンプ、栄光合格発表・入学式、ほか)

その3 (大船移転直後の栄光、ほか)

その4 (横浜市立日枝小学校、ほか)

その5 (田浦時代の栄光特集)

その6 (金沢八景・三溪園の潮干狩り、横浜国際仮装行列)

その7 (先生方特集 その1)

その8 (水彩画特集)

その9 (京急 定点撮影、雪の中の栄光ヒュッテ、ほか)

その10 (先生方特集 その2)

その11 (京急・京浜逗子駅と逗子海岸駅ほか)

その12 (現在の通学路と今年の栄光祭ほか)

＝連載継続中＝

● 訃報(2015年4月1日以降判明分)

卒業生

青池 博氏	(3期)	2015年1月12日
安田 隆一氏	(14期)	2015年3月16日
高岡 雅裕氏	(10期)	2015年4月1日
渡部 和博氏	(16期)	2015年4月2日
渡辺 恭一氏	(2期)	2015年4月8日
井街 元氏	(8期)	2015年5月5日
坪井 淳一氏	(45期)	2015年5月18日
水谷 武久氏	(7期)	2015年5月
平本 修氏	(16期)	2015年6月5日
田所 俊彦氏	(22期)	2015年6月14日
柳原 瑛氏	(12期)	2015年7月10日
鈴木 章夫氏	(5期)	2015年7月15日
松田 和久氏	(7期)	2015年7月29日
相川 博一氏	(3期)	2015年8月16日
岩崎 幸正氏	(5期)	2015年8月29日

謹んでご冥福をお祈りいたします。

● 次号(第85号):2016年4月発行予定。

● 投稿歓迎

同期会や支部のイベント報告、個人の体験記などの投稿を歓迎します。標準サイズは文章1,200文字程度+写真1枚。同窓会事務局宛てメールまたは封書でお送りください。

メールアドレス:admin@eikoalumni.org

住所:(本号第1頁にあります)。

● 編集後記

70周年事業に関連する記事の募集を行うため、大船校舎で学んだ各学年の期委員にコンタクトさせていただきました。時間が足らずに寄稿いただけなかった方は、次号に向けてご投稿ください。

アロイジオ会館で行われる同窓会の会合のたびに仮設校舎の建設の様子などを拝見しておりましたが、本号1ページに掲げた写真の通り、解体が始まっている景色(9月12日)はなかなかショッキングでした。小生は建設系の仕事についているので解体工事にも経験しています。その速さたるや元住人や元利用者の方の思い入れなどとは無縁に、ドライに進行していきます。重機で砕いて、切り刻んで…。そうした瓦礫が山になっている時には残念な気持ち強いのですが、これを撤去して整地を行うと、あら不思議。新しい建物への期待へと気持ちが切り替わります。次号では新校舎建設中の様子をお伝えできると思います。お楽しみに。(編集長：高橋英治(28期))